

2012年度

「学生による授業評価アンケート」
報告書

2012年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

立教大学

2013年 9月

はじめに

総長 吉岡 知哉

立教大学の授業評価アンケートの最大の特徴は、そこにフィードバックのプロセスが組み込まれていることにあります。1. 選択肢による定型的なアンケートに加え、「記述による評価」欄を設けて学生の直接的な意見を反映させていること、2. アンケート結果をただ集計するだけではなく、結果に対する個々の教員の所見を求めていること、3. 所見票を全学の学生・教職員に公開していること、そして4. 各学部ごとの総評が報告書の形でまとめられていること。授業評価アンケートの「進化」を生み出してきたのも、このフィードバックのメカニズムにほかなりません。

授業評価アンケートでは、基本的に「一教員一科目」という方針を取ってきました。もとよりこれは、このアンケートが教員の授業力向上のための一施策として始められたという事情を反映しています。授業評価アンケートは、教員による授業方法の自己チェックに資することを第一の目的としていたのです。

けれども同時に注目しておくべき点は、本アンケートが質問項目として、学生自身の授業への取り組み方、学生が授業から得ることができたものを問うていることです。このことは、「学生による授業評価アンケート」が、授業を、教員からの一方向的な知識や技術の伝達としてではなく、教員と学生との相互的な関係において捉えようとする考え方に支えられていることを示しています。

FD と略される概念が高等教育に導入された当初、一部ではパワーポイントをはじめとする情報ツールの使用能力など、問題を教員の技能評価に還元される傾向も見られました。そのような理解は、一方で学生を顧客と見なす教育＝サービス論と、他方で学生を製品とみなす品質管理論と適度に親和しつつ、一定の広がりを見たと言えるでしょうが、本学の FD 推進は、そのような流行とは無縁に、授業を教育の一環として捉えるという基本姿勢を貫いてきたのです。

授業評価アンケートの「進化」は、授業を教育の一環として捉えるという、まさにこの点において生じています。それぞれの学部がアンケート対象となる科目を独自に選定するとともに、「学部等による設問」を別個に設定することを通じて、アンケートの結果は、個々の教員の自己チェックを超えて、授業やカリキュラムのあり方の検討のための素材を提供するという役割をも果たしつつあります。

言うまでもなく、授業は、教育という人間の営みの最前線にあって、生身の知性が激しく接触する現場にほかなりません。それに対して授業評価アンケートの結果は常に過去に過ぎない。それにもかかわらず、否、それだからこそ、私たちはそこに表れた数字や言葉から、それらに還元されない何かの読み取ろうとします。その努力が、授業そのものを活性化させていくに違いありません。

本報告書が、教職員はもとより多くの人々、とりわけ授業の最も重要な当事者である学生の皆さんに読まれることを期待しています。

目次

はじめに	
1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について	1
1-1 目的	1
1-2 「報告書」作成の基本的な考え方	2
1-3 「所見票」について	3
1-4 実施科目の選定方針	4
2. 授業評価アンケートの実施概要	7
2-1 実施方式	7
2-2 設問項目	7
2-3 各学部等の科目選定方針	11
2-4 実施科目数	12
2-5 実施期間	12
2-6 回答者数	13
2-7 「所見票」の公開	13
3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック	15
3-1 科目担当者	15
3-2 学部等	15
4. 学部等総評	19
4-1 文学部	20
4-2 経済学部	23
4-3 理学部	26
4-4 社会学部	28
4-5 法学部	30
4-6 経営学部	33
4-7 異文化コミュニケーション学部	36
4-8 観光学部	39
4-9 コミュニティ福祉学部	41
4-10 現代心理学部	43
4-11 全学共通カリキュラム	46
4-12 学校・社会教育講座	53
5. 2012年度のまとめと今後の展望	57
6. 集計データ（資料編）	59
6-1 回答者数・回答率	59
6-2 学部等別平均値	60
6-3 「グループ集計」科目一覧	72

1. 本学における「学生による授業評価アンケート」について

本学における授業評価アンケートは、2004年度から毎年実施しており、その実施目的は開始以来これまで変更しておらず、初年度である2004年度報告書に書かれている通りである。以下にそれを転載する。

1-1 目的

本学における全学規模の学生による授業評価アンケートは、2002年7月10日に総長に提出された「全学FD検討委員会答申」に始まる。その中で、本学にとっての最重要FD課題として次の3点が挙げられている。第一に「教員における授業力の向上」、第二に「カリキュラム編成の合理化」、第三に「成績評価の厳正化」である。そして、その中でも緊急性がもっともあるとされたのが第一の課題であり、その中で「授業力向上に向けての具体策」のひとつとして挙げられていたのが「学生による授業評価の制度的実施」である。それを受けて、2002年12月18日付け文書「FDについて—学生による教育評価アンケートの2003年度実施に当たって—」の中で総長は、敢えて「教育評価」という言葉を用い、「個々の科目の授業やその担当教員への評価をこえて、広く本学の教育について、学生の評価を参照したい」と述べ、「学生による教育評価アンケート」をできる限り早期に実施したいとの方針を明らかにした。

それを受けて直後の2002年12月21日には早くも全学教務委員会FD専門部会の第1回部会が招集され、年度をまたいで検討が続けられた。その過程で、2003年度実施は見送られ2004年度実施を目標とすること、施設その他の教育条件一般を問うアンケートの前に、授業そのものに目標を絞って問うことなどの合意が形成され、「学生による授業評価アンケート」を行うことが決まった。そして、具体的アンケート項目作成作業が開始され、他大学のものをも参照しつつも、三つの独自案にまとまってゆき、並行して行われていたアンケートの目的や実際の実施方法などの検討結果とも連動しながら、最終的にひとつの案に集約されていった。その結果は部長会に報告され、了承を得て、その後、各学部教授会とのやり取りがあり、2003年の秋に2004年度前期から「学生による授業評価アンケート」を実施することが正式に決定した。そして、2004年度4月から「学生による授業評価アンケート実施委員会」が立ち上げられ、前期と後期に実施された。

その実施の目的は、部会における議論の結果、以下の点にあると考えられるにいたった。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

以上である。

要するに、本学の「学生による授業評価アンケート」は端的に言って、個々の教員による授業を、学生がより充実して学習を進め大学としての教育力が今より一層効果的に機能

することを旨として改善し、その結果として学部・学科としての教育力をも増進することを唯一の目的とする、ということである。そうして、学生をも巻き込んで、本学が知的に活発で、創造性に富み、常に先進的に新しい知を発信し、それに基づく生き方を常に提案し続ける力を保持することができるようになることを最終目的とする。

それに対して、場合によっては教員の活力を削ぐことになりかねない教員管理の視点は厳しく排除される。大学は教職員と学生が相互に自己管理することを前提に、自由に精神活動をおこなう場である。特定の目的のために教職員ならびに学生を管理し、特定の方向へ向けるべく力を加えることは、大学本来の知的創造力を失わせ、ひいては大学が本来持っているはずの社会的役割を放棄し、その負託に答えられなくなることを意味する。その意味で、この「学生による授業評価アンケート」結果のデータは特定の意図を持って処理され、一律の基準の下に評価されることはない。それゆえに、集計データの統計的処理はアンケート対象になった個々の教員に任されることになった。それが所見票に表現されるのである。

このアンケートは大学としての教育力向上を目的としておこなわれるので、学生の自覚を促すことも期待されている。そのことは、一朝一夕に実現させることは難しいかもしれないが、学生たちの評価アンケート結果に対して、各教員がそれぞれの学問的見識を持って所見票で答え、実際の授業に反映する努力が積み重ねられることによって、徐々に現実化してゆくであろう。現在の大学では学生の自主的活動が必ずしも本来期待されているほど十分でなく、大学生の学校生徒化が進んでいると一般に言われている。その中で、学生の主体的参加が教員との関係を変えるきっかけになることを直接に経験することで、学生の姿勢が変化することを期待したい。

さらに、アンケート結果、所見票が公表されることにより、教職員相互間、あるいは教員と学生との間で切磋琢磨する風潮が広まれば、大学全体として、個々の学問研究と教育の活動に根ざした種々の改善が期待される。カリキュラムはもちろん、組織の運営体制や施設なども、このアンケートを手がかりにその評価の俎上に載せられることになってゆくであろう。

この「学生による授業評価アンケート」が、大学の知的エネルギーを構成している教職員相互の関係や教職員と学生との関係、あるいは学生相互の関係などを揺り動かし、多様な観点から相互に力を及ぼしあう結果になることを、我々は心から期待したい。そして、そのことがやや動脈硬化が進行してきた大学という組織にも再び熱い血を通わせ、教職員も学生も本学に集うことこそがその熱い血の拍動を生み、学問に触れることが楽しくて仕方がないという状況を生み出すことを心から願う。

1-2 「報告書」作成の基本的な考え方

「学生による授業評価アンケート」は調査である限りその結果がまとめられなければならない。我々はそれを報告書という形で世に問う。この報告書はアンケート対象になった個々の授業が 1-1 で述べられた目的に沿って学生によって評価された結果を総体として、学部・学科ごとに、そして大学全体として、その教育力を評価し、成果の上がっていることに関してはその成果の意味を明らかにし、さらにその成功を維持するための方策を考え、改善が必要なことに関しては、その原因を究明し、その克服のための方法を構築する。そ

して次回のアンケートにその改善努力の成果を問う。

この報告書の構成は以下のとおりになっている。

まず、(1)すでに述べたとおりこのアンケートの目的を明らかにする。その次に、(2)その目的に沿ったアンケート実施の概要を報告する。その上で、(3)統計処理上の技術的方針について、我々の考え方を明示し、データの性格を規定し、将来の調査をも視野に入れた分析方針を提示する。そして、(4)全学的な総評をおこなう。最後に(5)学部やその他の教育組織ごとの総評をまとめる。以上である。

この報告書はあくまで1-1のアンケートの目的に謳われている⑥学部・学科としてのカリキュラムの有効性を測定するための資料、および⑦大学としての教育力向上に必要な方針を立てるための資料を提供するためにおこなわれる。したがって、この報告書には個々の授業やその担当者、あるいはある学科の科目として特定できるような記述は記載されない。

それと同時に、この作業は全体としての③学生の学習姿勢を知るための資料、および④学生の授業への期待のありかを知る資料を得ることにつながる。授業に参加する学生たち自身の勉強に対する姿勢もアンケート項目に入っているため、それらについてはこの報告書の中で、各所で触れられることになるだろう。

これらの目的達成を検証することを狙い、我々は報告書を作成する。ちなみに目的の①と②は次に述べられる所見票に示されるだろう。⑤学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起するという点については、この報告書や同時に作成される所見票(とその集成である所見集)に示されるのではなく、今後おこなわれる将来の「学生による授業評価アンケート」にその成果が示されることになるだろう。

1-3 「所見票」について

個々の科目のアンケート結果は、同じ科目の将来の開講の際に生かされるはずである。しかし、一方ではアンケートに答えた学生たちには、将来の授業では直接的にフィードバックすることはできない。そこで、個々の科目のアンケート結果についても、何らかの形で少なくとも当該学生たちには公開される必要がある、と我々委員会は考えた。その際には、単純にアンケート項目の集計結果だけを公開する方法と、それに対する教員の所見をも添えて公開する方法が考えられる。

我々は個々の科目担当者に、自分の科目についての自己点検・評価という意味でアンケート結果のデータを読んでもらい、「授業評価に対する担当教員の所見」、「自由記述欄に対する担当教員の所見」、「改善に向けた今後の方針」を書いてもらうこととした。この3つの教員記述にアンケートのすべての項目についてその結果を帯グラフに表したデータを付したものを「所見票」と称した(p.6参照)。そして、この所見票を学生に公開することにした。

所見票を書くことはアンケート対象教員にとって負担にはなる。しかし、我々は敢えて対象となった教員全員に所見票作成を依頼した。なぜならば、自分の授業についての学生による評価が出たならば、それについての対処を明確に行い、アンケートに協力してくれた学生たちに直接回答することも、授業担当者である教員の義務だと、我々は考えたからである。所見票はそのすべてが1冊にまとめられて所見集とされ、学生に対して学内で公

開されることになる。

所見票の狙いは以下の点にある。

- ① 教員がアンケート結果についてそれを直視し、自らの見解を発表する場を与える。
- ② 学内で公表されることによって、学生に直接回答する機会を与える。
- ③ アンケートに含まれる自由記述についてはデータ化できないので、教員の直接的コメントを通してその内容を明らかにすることを求める。
- ④ 改善に向けた明確な決意と工夫を書くことにより、次回アンケートとの比較を行い易くし、具体的授業改善の実現を可能にする。

以上である。

①については、教員側にも、もし学生からいわれのない不評や批判があった場合には、弁明する機会が欲しいとの声もあった。また、所見票を書けば、アンケート結果をつぶさに直視し、それに向き合って、自分に取り入れる契機とすることができる。さらに、データの多様な集計を当該教員に任せ、教員の必要に応じた分析を行い、納得の行く分析結果を出してもらうことにも意を注いだ。所見票はその結果を発表する場でもある。

②については、学生に対する直接回答であることを重視し、教員が自らの見解を自由に率直に表明しやすくするという趣旨で、公開は学内に限り、学生の便宜を考えて図書館に配置することにした。

③については、自由記述が単純にデータ化できないため、結果すべてを所見票に載せることはできない。また、記述内容によっては書き手が特定される場合もある。そこで、それを読んだ教員の責任でまとめてもらうことにして、教員所見にそのための欄を設けた。

④については、これを書くことでこのアンケートの目的で指摘された教員の自己研修を促すことになる。また、所見集が学内で公開されることから、学生以外にも同僚教員の目に触れる機会もあり、相互研修にもなることが期待される。

以上、所見票はこのようなことを期待して作られたのである。

(以上、2004年度報告書より転載)

1-4 実施科目の選定方針

本学における「学生による授業評価アンケート」は2004年度にスタートし、2006年度までの当初3年間は「講義科目を対象に1教員1科目」の原則で実施した。これにより、教員個々人の意識が高まり、授業改善の効果が上がったことは、各項目の数値が有意に上昇したことから明らかである。

2007年度には、スタート時に確認された目的のうち、「学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る」「大学として教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る」に比重を移し、実施対象科目に一部の演習科目を加えた上で、各学部・学科等の必要性により科目を選定する方式に切りかえた。2008年度、2009年度はこの方針を踏襲して実施した。

一方で、授業評価アンケート開始当初から、アンケートは単年度ごとにその目的と実施内容を検討・決定するのではなく、数年度単位の中期的な計画に基づいて展開する必要性が指摘されており、その策定に向けて、継続的に議論を行ってきた。

2006年度には、「1 教員 1 科目の原則による実施は、教員個々人の意識を高め、教員全員が自らの自己研修の資料を得る観点から、少なくとも数年に一度は必要である」との全学的合意がなされた（2007年1月25日、部長会）。その後、他大学の実施状況調査を行うとともに、全学教務委員会および教育改革推進会議での学部等からの意見収集ならびに協議を経て、2009年度の教育改革推進会議（2009年11月19日）において、2010年度以降の基本方針を以下のとおり決定した。

- ① 授業評価アンケートは毎年実施する。
- ② 「1 教員 1 科目」の原則による実施は、3年に一度とする。
- ③ ②以外の年度は、「学部等の必要性に応じた選定」により実施する。

2010年度は、定められた基本方針に拠って実施する初年度となり、上記の②「1 教員 1 科目」の原則により実施した。

2012年度は、2011年度に引き続き、基本方針に拠って上記の③「学部等の必要性に応じた選定」により実施した。各学部等における科目選定方針については、「2-3 各学部等の科目選定方針」（p.11）を参照されたい。

2012年度後期 立教大学「学生による授業評価アンケート」所見票

科目コード JHK01 科目名 授業評価0.1 開講曜日 火 開講時間 3 担当者 立教 太郎 教室 1111 履修者数 60 回答数 56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー

*①~⑦, ⑧)は「該当しない」も含む

授業評価に対する担当教員の所見

- I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。
- 1) 授業全体を通じての出席率 (5: 90%以上 4: 70~89% 3: 50~69% 2: 30~49% 1: 30%未満)
 - 2) この授業に積極的に参加した
 - 3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた
 - 4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした
 - 5) シラバス (履修事項の講義内容) は受講に役立った
 - 6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (合計して、1週間に 5.3時間以上、4.2~5.2時間、3.1~4.1時間、2.1~3.0時間、1.0時間)

記述による評価に対する担当教員の所見

- II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。
- 1) 聞きやすい話し方だった
 - 2) 各回の授業内容の量が適切だった
 - 3) 各回の授業のねらいは明確だった
 - 4) 各回の授業内容は明確だった
 - 5) 十分な精選性が保たれた
 - 6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった
 - 7) 板書のしかたが適切だった
 - 8) 映像授業教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった
 - 9) 教員は授業の準備を周到に行っていた

改善に向けた今後の方針

- III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと感じますか。
- 1) 自分にとって新しい考え方・発想
 - 2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識
 - 3) 自分で調べ、考える姿勢
 - 4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味
- IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。
- 1) わかりやすい授業だった
 - 2) 授業全体の目標が明確だった
 - 3) 学問的興味をかきたてられた
 - 4) この授業を受けて満足した

2. 授業評価アンケートの実施概要

本報告書において、「学部等」とは、各学部、全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を示す。また、学部表示は科目開設学部を示しており、回答者（学生）の所属ではない。

2-1 実施方式

無記名式の質問紙によるアンケート方式にて実施した。また、アンケートの実施は授業時間内（授業開始から 30 分間、もしくは授業終了前の 30 分間）において行うこととした。

2-2 設問項目

5 段階による評価方式の設問を 23 設問、記述による評価欄を 2 箇所の構成とした（pp. 8-9 参照）。設問の中には、必ずしも全科目には該当しないと思われるような設問もあるが、実施委員会としては、各設問項目の数値は、科目の特徴に照らして各科目担当者の裁量により解釈されるものとしている。

また、学部等によって独自の設問が設定できるよう、1 学部あたり最大で 7 設問を設定できるようにした。2012 年度は、文学部（2 設問）、経済学部（6 設問）、理学部（3 設問）、観光学部（6 設問）、現代心理学部（3 設問）、全学共通カリキュラム（3 設問）が学部設問項目を設定した（p.10 参照）。

2012年度立教大学授業評価アンケート

このアンケートは、立教大学の授業を改善し、さらに充実させることを目的に行われます。調査は無記名で行われ、回答の内容が成績評価に影響することはありません。大学を構成する重要な一員である学生として、みなさん自身が大学教育をより良いものにするという意識のもとに、率直かつ責任をもって回答してください。
立教大学

(注意) 1. マークにはHBの鉛筆を使うこと。 2. 太枠内に必要事項を記入の上マーク欄に正しくマークすること。 3. 誤りは消しゴムで完全に消すこと。
4. 指定以外のところには書きこまないこと。 5. 折りまげたり汚したりしないこと。

指示に従って「科目コード」、「学部」、「学科」、「学年」をマークしてください。

科目コード/Course No.	本学学部生 (学部・学科は学生番号の3・4桁目のアルファベット)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	学部 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学科 (A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I)
(A) (B) (C) (D) (E) (F) (G) (H) (I) (J) (K) (L) (M)	(M) (N) (S) (T) (U)
(N) (O) (P) (Q) (R) (S) (T) (U) (V) (W) (X) (Y) (Z)	学年 ① ② ③ ④
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	本学学部生以外
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別外国人学生 (Special International Students) (特外)
① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	特別聴講学生 (f-Campus、立教女学院短大など) (聴講)
	上記以外 (本学大学院生、科目等履修生など) (その他)

以下の項目に対して、あなたにとって5段階のどの評価であるか、〔評価欄〕にマークしてください。

5：大いにそう思う 4：そう思う 3：どちらともいえない 2：あまりそう思わない 1：そう思わない
〔評価欄〕

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 授業全体を通じての出席率 (次の中から選んでマークしてください) 5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満	⑤ ④ ③ ② ①
2) この授業に積極的に参加した	⑤ ④ ③ ② ①
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	⑤ ④ ③ ② ①
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	⑤ ④ ③ ② ①
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (次の中から選んでマークしてください) 平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間	⑤ ④ ③ ② ①
II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) 聞きやすい話し方だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 各回の授業内容の量が適切だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 各回の授業のねらいは明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
4) 各回の授業内容は明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
5) 十分な静粛性が保たれた	⑤ ④ ③ ② ①
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	⑤ ④ ③ ② ①
7) 板書のしかたが適切だった	該当しない ⑨ ⑤ ④ ③ ② ①
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	該当しない ⑨ ⑤ ④ ③ ② ①
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	⑤ ④ ③ ② ①
III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。	
1) 自分にとって新しい考え方・発想	⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	⑤ ④ ③ ② ①
3) 自分で調べ、考える姿勢	⑤ ④ ③ ② ①
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	⑤ ④ ③ ② ①
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。	
1) わかりやすい授業だった	⑤ ④ ③ ② ①
2) 授業全体の目標が明確だった	⑤ ④ ③ ② ①
3) 学問的興味をかきたてられた	⑤ ④ ③ ② ①
4) この授業を受けて満足した	⑤ ④ ③ ② ①

※裏面にも設問がありますので、裏面も記入してください。

V. 学部等による設問

(文学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった

(経済学部)

- 1) (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった
- 2) (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた
- 3) (基礎ゼミナール1) レジューメやレポート作成の力がついた
- 4) (情報処理系科目※) 表計算ソフト (Excel) の応用力が身についた
- 5) (情報処理系科目※) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた
- 6) (情報処理系科目※) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた

※情報処理系科目とは、以下の科目をさす

情報処理入門、経済情報処理 A・C、政策情報処理 A、財務情報処理 A

(理学部)

- 1) 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた
- 2) (1年次前期必修科目のみ) 教員は高校までの授業スタイルとの違いを考慮して授業展開をしてくれた
- 3) (必修科目のみ) 授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同士が共同して解決策をとった

(観光学部)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 4) わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した
- 5) わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた
- 6) わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた

(現代心理学部)

- 1) この授業の受講者数は適切だった
- 2) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった
- 3) 現代心理学部の教育研究設備に満足している

(全学共通カリキュラム)

- 1) この授業の教室の大きさは適切だった
- 2) この授業の受講者数は適切だった
- 3) この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった

2-3 各学部等の科目選定方針

実施対象科目は、これまで通り、学部科目（全学共通カリキュラムおよび学校・社会教育講座を含む）のうち、専門演習、実験、集中や実技を伴う科目、全学共通カリキュラム言語科目を除外した科目とした。

2012年度は、基本方針により「学部等の必要性に応じた選定」により実施した（詳細は p.5 参照）。各学部等の選定方針は、下表の通り。

学部等	科目選定方針
文学部	(1) 各学科・専修の導入教育（初年次教育）科目 ①1年次必修科目 ②1年次で履修可能な科目 ③2年次必修科目 ④2年次で自動登録となる科目 (2) 文学部基幹科目 (3) 各学科・専修で必要と認める科目
経済学部	(1) 「講義科目1教員1科目」の調査は実施しない (2) 本年度については原則前期に実施する (3) 共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の1年次科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する
理学部	(1) 数学科では新カリキュラム（2010年度より移行）の有効性を検証するために、新カリキュラムにおける新規に設計した必修科目・選択必修科目について、定点観測（毎年、同じ科目で調査）を行う (2) 物理学科では原則として複数担当科目以外の全ての講義科目を選定する。経年変化を見るために、なるべく毎年同じ科目について、アンケートを実施する。ただし、講究は受講者が少ない場合が多いので、担当者の希望がある場合のみ実施することにする (3) 化学科では原則として、必修講義科目ならびに複数教員担当科目をのぞく選択講義科目の経年変化を調査するために、毎年同じ科目についてアンケートを実施する (4) 生命理学科では授業評価に対する改善策の具体的効果を継続的に検証するために、2012年度も同じ科目についてアンケートを実施する (5) 共通教育科目では独自にアンケートを行うため実施しない
社会学部	(1) 必修科目はすべて実施する (2) 「講義科目」については、科目の種類を問わず、なるべく「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う (3) 産業関係学科の科目は実施しない
法学部	(1) 3年に1回全教員（専任・兼任）について、1教員1科目を原則に行う (2) (1)を行わない年度については、本学で初めて授業を開講する教員、およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行う ※本年度は(2)が該当する
経営学部	「演習」を除く全科目で実施する
異文化コミュニケーション学部	必修科目の講義科目のうち、前後期で担当者が異なる科目
観光学部	(1) 原則としてひとりの教員に1科目以上を対象とする (2) 学部専任教員に関してはすべての担当科目を対象とする。ただし、「***1」「***2」をペアで担当している場合には、「***1」のみを対象とする (3) 専門演習、実験、実技を伴う科目は対象としない (4) 複数教員担当科目は対象としない (5) 集中講義は対象としない
コミュニティ福祉学部	(1) 1教員1科目以下の実施を原則とする (2) 資格科目を優先する (3) 演習科目は対象外とする (4) 昨年度実施科目を優先する
現代心理学部	(1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目（旧カリ「総合展開科目」）」全科目 (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」 (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」
全学共通カリキュラム	全カリ立教A、領域別A、主題別Aの講義系科目を対象とし、担当する1教員（専任・兼任）1科目の実施とする
学校・社会教育講座	(1) 履修者5名以下が予想される科目は対象外とする (2) 教職課程は「講義科目1教員1科目」を原則として実施する (3) 他課程は、今年度、特に授業評価を要する重点的科目に限って、アンケート実施する

2-4 実施科目数

実施科目数は前期 660 科目、後期 539 科目、合計 1199 科目であった。

実施予定科目数は、前期 671 科目、後期 557 科目、合計 1228 科目であったので、全学の実施率（実施科目数/実施予定科目数）は 97.6%（1199/1228）、所見票提出率は 79.1%（949/1199）となった。

科目開設学部等	実施 予定 科目数	実施学期内訳		実施 科目数	実施学期内訳		所見票 提出数	実施学期内訳	
		前期	後期		前期	後期		前期	後期
文 学 部	140	87	53	134	83	51	110	66	44
経 済 学 部	67	52	15	67	52	15	59	44	15
理 学 部	96	46	50	96	46	50	86	41	45
社 会 学 部	136	70	66	132	68	64	95	47	48
法 学 部	17	8	9	16	8	8	13	7	6
経 営 学 部	186	93	93	183	92	91	118	56	62
異文化コミュニケーション学部	6	3	3	6	3	3	5	2	3
観 光 学 部	102	61	41	99	59	40	74	41	33
コミュニティ福祉学部	103	55	48	100	54	46	80	40	40
現 代 心 理 学 部	29	13	16	27	12	15	10	5	5
全学共通カリキュラム	282	144	138	275	144	131	238	123	115
学校・社会教育講座	64	39	25	64	39	25	61	38	23
合 計	1,228	671	557	1,199	660	539	949	510	439

2-5 実施期間

可能な限り授業が進行した時期に実施することが望ましいとの考えから、2012 年度より最終授業週も授業評価アンケートの実施期間とした。アンケートの実施は第 1 週を原則とし、最終授業週は予備週とした。

前期：2012 年 7 月 7 日（土）～7 月 20 日（金）

後期：2012 年 12 月 22 日（土）、2013 年 1 月 7 日（月）～1 月 23 日（水）

2-6 回答者数

アンケート実施科目の延べ回答者数を、科目の開設学部等別に下表にまとめた。参考のために、履修者数も表に載せた。

科目開設学部等	前 期		後 期		合 計	
	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数	履修者数	回答者数
文 学 部	6,373	4,371	4,227	2,863	10,600	7,234
経 済 学 部	2,202	1,812	1,666	962	3,868	2,774
理 学 部	3,814	2,654	3,418	1,918	7,232	4,572
社 会 学 部	10,924	6,288	8,197	4,380	19,121	10,668
法 学 部	1,917	933	1,393	614	3,310	1,547
経 営 学 部	8,152	5,398	7,645	4,416	15,797	9,814
異文化コミュニケーション学部	215	188	205	185	420	373
観 光 学 部	6,653	4,148	3,767	2,502	10,420	6,650
コミュニティ福祉学部	5,352	3,378	4,381	2,689	9,733	6,067
現 代 心 理 学 部	1,726	1,084	1,163	559	2,889	1,643
全学共通カリキュラム	23,573	14,658	18,076	11,209	41,649	25,867
学校・社会教育講座	2,607	2,075	1,168	965	3,775	3,040
合 計	73,508	46,987	55,306	33,262	128,814	80,249

2-7 「所見票」の公開

所見票（科目別の集計結果および科目担当者による所見）は、WEB上で学生・教職員（兼任講師含む）に対し閲覧に供している。加えて、「所見集」としてまとめ、池袋図書館および新座図書館においても閲覧に供している。

3. 科目担当者・学部等への集計結果のフィードバック

3-1 科目担当者

担当科目の集計結果（下記①、②、③）をアンケート実施1～2ヶ月後に「所見票入力システム」上に掲載した。

- ①集計結果票（p.16 参照）
- ②「記述による評価」一覧票
- ③アンケート元データ

これを基に、科目担当者には所見票の執筆を依頼した。

3-2 学部等

以下の方針で、集計結果を提供した。

1) 集計の方針

- ①学部等によって科目選定方針が異なるため、集計・分析は学部等別に行い、全学での集計や学部等間の比較、昨年度との比較は行わない。
- ②学部等が独自に設定した基準でアンケート実施科目をグループ化し、科目間の比較や全体傾向を把握するグループ集計を実施する。グループ集計の実施の有無は学部の判断に委ねる。

2) 集計内容

①回答者数・回答率

アンケート回答者を学部等別、学年別に集計した。また、アンケート実施科目の延べ履修者数と延べ回答者数を集計し、学部等別に回答率を算出した。（資料編 p.59 参照）

②学部等別平均値

設問項目別に平均値を算出し、回答割合を帯グラフで示した。また、学科等別、授業規模別、学年別の平均値を算出した。（学部等別平均値は、資料編 pp.60-71）

③設問項目間の相関

相関係数を学部等別、学科等別に算出した。学部等別の相関においては、IV総合評価、特にIV4「この授業を受けて満足した」を中心に、他の設問項目との関連をみた。

④グループ集計（実施学部のみ）

アンケート実施科目を学部等の指定によりグループ化し、設問ごとに回答割合を帯グラフで示した。また、設問項目別平均値をレーダーチャートと一覧表で示した。（pp.17-18 参照）

学部等には、上記「2) 集計内容」と、科目担当者が執筆した所見票を送付し、学部等総評の執筆を依頼した。

2012年度後期 立教大学授業評価アンケート 集計結果票

科目コード	JHK01	開講曜日	火	担当者	立教 太郎	履修者数	60
科目名	授業評価01	開講時限	3	教室	1111	回答数	56

単純集計結果 (5:大いにそう思う, 4:そう思う, 3:どちらともいえない, 2:あまりそう思わない, 1:そう思わない)

5	4	3	2	1	無回答*	エラー	平均
回答者数、()内はパーセント							1から5の数字の平均

*II-7)、8)は「該当しない」も含む

I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上 4:70%~89% 3:50%~69% 2:30%~49% 1:30%未満)	36 (64%)	15 (27%)	4 (7%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.54
2) この授業に積極的に参加した	16 (29%)	20 (36%)	14 (25%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.82
3) この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	8 (14%)	14 (25%)	19 (34%)	9 (16%)	6 (11%)	0	0	3.16
4) 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7 (13%)	22 (39%)	14 (25%)	10 (18%)	3 (5%)	0	0	3.36
5) シラバス (履修要項の講義内容) は受講に役立った	16 (29%)	25 (45%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	3.95
6) この授業に関連して、授業時以外に学習した時間 (平均して、1週間に 5:3時間以上 4:2~3時間 3:1~2時間 2:1時間未満 1:0時間)	4 (7%)	3 (5%)	7 (13%)	17 (30%)	25 (45%)	0	0	2.00

II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) 聞きやすい話し方だった	23 (41%)	23 (41%)	9 (16%)	1 (2%)	0 (0%)	0	0	4.21
2) 各回の授業内容の量が適切だった	14 (25%)	30 (55%)	8 (15%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.00
3) 各回の授業のねらいは明確だった	17 (30%)	23 (41%)	12 (21%)	2 (4%)	2 (4%)	0	0	3.91
4) 各回の授業内容は明確だった	17 (30%)	26 (46%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.00
5) 十分な静粛性が保たれた	42 (75%)	13 (23%)	1 (2%)	0 (0%)	0 (0%)	0	0	4.73
6) 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	19 (34%)	25 (45%)	8 (14%)	4 (7%)	0 (0%)	0	0	4.05
7) 板書のしかたが適切だった	8 (18%)	14 (31%)	16 (36%)	5 (11%)	2 (4%)	6	5	3.47
8) 映像視覚教材 (パワーポイント、ビデオなど) の使用が効果的だった	6 (13%)	6 (13%)	26 (57%)	3 (7%)	5 (11%)	5	4	3.11
9) 教員は授業の準備を周到に行っていた	21 (38%)	19 (34%)	10 (18%)	6 (11%)	0 (0%)	0	0	3.98

III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。

1) 自分にとって新しい考え方・発想	22 (39%)	20 (36%)	6 (11%)	8 (14%)	0 (0%)	0	0	4.00
2) 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	22 (40%)	26 (47%)	4 (7%)	3 (5%)	0 (0%)	0	1	4.22
3) 自分で調べ、考える姿勢	13 (23%)	21 (38%)	13 (23%)	8 (14%)	1 (2%)	0	0	3.66
4) 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25 (45%)	23 (42%)	6 (11%)	1 (2%)	0 (0%)	1	0	4.31

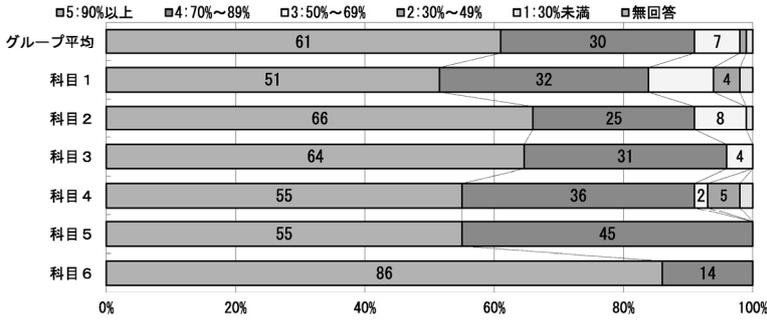
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。

1) わかりやすい授業だった	25 (45%)	19 (34%)	8 (14%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14
2) 授業全体の目標が明確だった	22 (39%)	21 (38%)	10 (18%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.09
3) 学問的興味をかきたてられた	27 (48%)	14 (25%)	12 (21%)	2 (4%)	1 (2%)	0	0	4.14
4) この授業を受けて満足した	27 (48%)	15 (27%)	10 (18%)	3 (5%)	1 (2%)	0	0	4.14

設問別帯グラフ

(5:大いにそう思う 4:そう思う 3:どちらともいえない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない 9:該当しない(Ⅱ-7,Ⅱ-8のみ) 無回答)

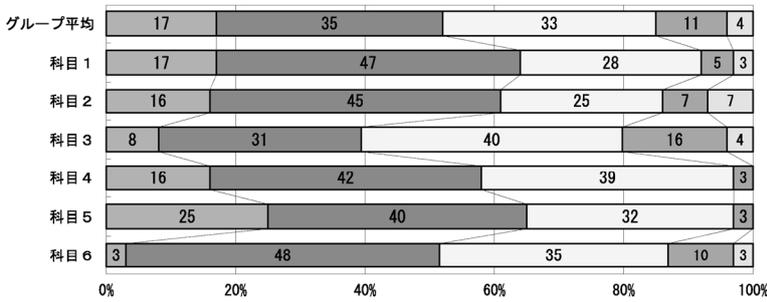
I-1 授業全体を通じての出席率



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	4.62	-
科目 1	19	4.35	-
科目 2	15	4.66	-
科目 3	20	4.61	-
科目 4	21	4.45	-
科目 5	18	4.50	-
科目 6	20	4.93	-

*「無回答」は除く

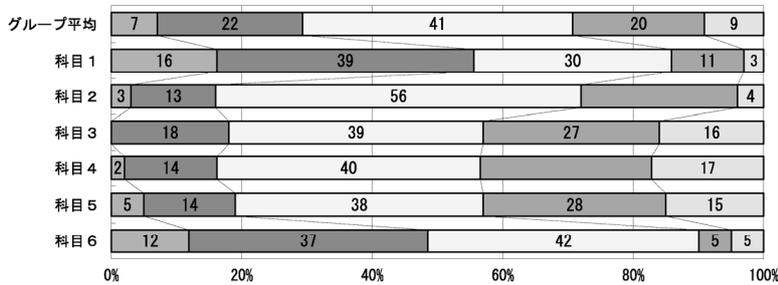
I-2 この授業に積極的に参加した



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.61	-
科目 1	18	3.72	-
科目 2	15	3.69	-
科目 3	20	3.20	-
科目 4	21	3.78	-
科目 5	18	3.90	-
科目 6	20	3.46	-

*「無回答」は除く

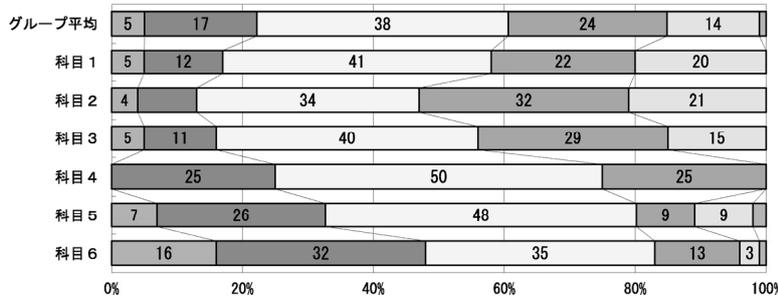
I-3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた



	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	113	3.01	-
科目 1	19	3.58	-
科目 2	15	2.76	-
科目 3	20	2.65	-
科目 4	21	2.63	-
科目 5	18	2.93	-
科目 6	20	3.67	-

*「無回答」は除く

I-4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした

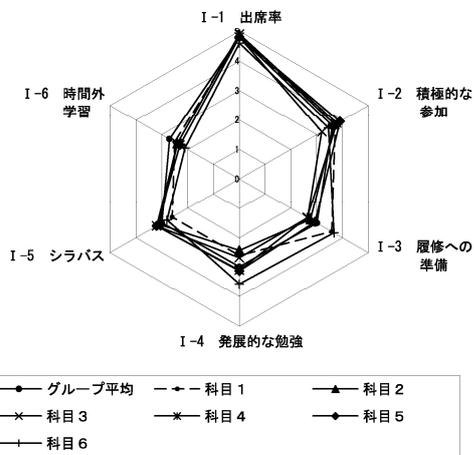


	回答者数*	平均	無回答
グループ平均	111	2.98	2
科目 1	19	2.60	-
科目 2	15	2.42	-
科目 3	20	2.67	-
科目 4	21	3.09	-
科目 5	17	3.12	1
科目 6	19	3.56	1

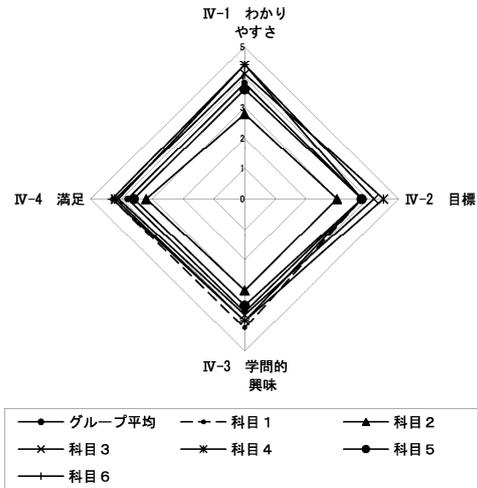
*「無回答」は除く

平均値のレーダーチャート

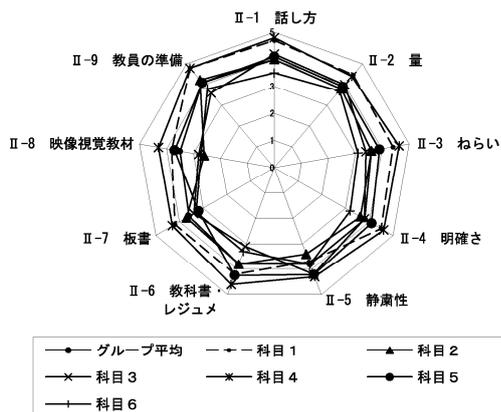
I. この授業へのあなたの取り組み方について、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



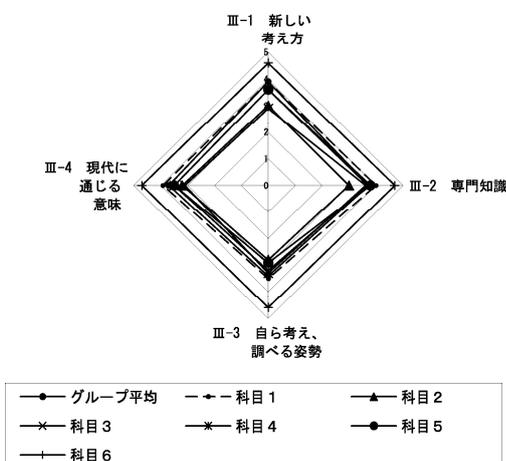
IV. 総合的にみて、この授業は以下の項目にどの程度当てはまりますか。



II. この授業の進め方は、以下の項目にどの程度当てはまりますか。



III. この授業からあなたは次のものを得ることができたと思いますか。



5段階評価

- 5: 大いにそう思う
- 4: そう思う
- 3: どちらともいえない
- 2: あまりそう思わない
- 1: そう思わない

< I -1 >

- 5: 90%以上
- 4: 70から89%
- 3: 50~69%
- 2: 30~29%
- 1: 30%未満

< I -6 >

- 5: 3時間以上
- 4: 2~3時間
- 3: 1~2時間
- 2: 1時間未満
- 1: 0時間

4. 学部等総評

学部等総評は、科目ごとの集計結果、各教員の執筆した所見票および学部全体の集計結果をもとに、下記を基本形として、各学部等が執筆した。

<構成の基本形>

1. 科目選定方針とねらい
2. 集計データにみられる結果のまとめ
3. 担当教員の所見票に対するまとめ（「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ、「改善に向けた今後の方針」のまとめ）
4. 学生からの意見（記述による評価）の集約（「肯定的評価として多い意見の集約」、「否定的評価として多い意見の集約」）
5. 今後の改善に向けて

4-1 文学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度は以下の方針で科目を選定した。例年通り、1年次、2年次の導入教育を主要な対象としている。

(1)各学科・専修の導入教育(初年次教育)科目

- ①1年次必修科目
- ②1年次で履修可能な科目
- ③2年次必修科目
- ④2年次で自動登録となる科目

(2)文学部基幹科目

(3)各学科・専修で必要と認める科目

2. 集計データにみられる結果のまとめ

合計134科目についてアンケートを実施した。回答率は68.25%で全学平均より約6%高くなっている。昨年および一昨年の回答率は66.51%および65.45%であり、若干高い。文学部の全回答者数は7,234名であり、その学年別内訳は以下のとおりである。1年次3,273名、2年次2,169名、3年次1,118名、4年次520名、不明154名。調査目的が1年次、2年次を主たる対象としているため、この人数のばらつきはやむを得ない。

4年生は卒論関係を中心とした演習中心の生活のため、このアンケート対象になるのは講義科目だけであり、回答チャンスが少ない。だが、IVの4つの設問に対する回答の学年別平均値を見ると4年生がすべての設問に関して最高の数値を出しており、演習より規模の大きな講義科目においても、それまでの学習成果に基づき、下級生より理解力に優れ、大学文化に慣れていて、的確な理解と学習経験の自覚を持つことができていると推察される。また、就職活動を経て主体的に知的問題関心を持つようになってきているとも考えられる。この人数でも4年生の動向はうかがわれる。

設問Iについて。1出席率(4.63)が極端に高く、2積極性(3.97)についても一定のレベルを保っているのに対し、3準備(3.34)、4発展的学習(3.28)が低く、6授業外での学習時間(2.37)の極端な低さは、毎年指摘されておりながら、なかなか改善されない。対策の工夫が喫緊の課題である。これら3項目ともに学年別では有意な差がないが、規模(50名以下、51~100名、101~150名、151名以上)が大きくなるにつれて評価が低くなる傾向があり、特に150名を超える規模では著しく低い(例、6授業外学習時間、50名以下2.88、151名以上2.07)ことも、対策のヒントになるだろう。

設問IIについて。例年通り9授業準備(4.26)の評価が際立って高い。多くの設問がおおむね4以上である中で、これも例年通り7板書(3.56)の評価が極端に低い。ただし、この項目の回答者数が全体の回答者数(約7200名)の60%(4309名)に過ぎない。さらにはそのうちの40%が「該当しない」と回答している。板書が問題になる授業はかなり減ってきているようだ。8視覚教材(4.12)がやはり70%の回答率で評価が比較的高いのは、視覚教材を使用する授業が増加し、しかも板書よりも学生に好まれていることの表れだろう。5静粛性(3.80)はさらなる改善を期したい。また、全体的にIIについても、規模が大きくなるにつれて評価が下がる傾向が見られる。学年別では比較的2年次と4年次が高い。

設問Ⅲについて。すべてが 3.54 から 3.91 の間であり、4.00 以上はないものの、授業から得ることのできたものについては、一応の評価を受けていると考えられる。規模別では 1 新しい考え方・発想、2 基本的な専門知識、4 授業内容は明確で 101 名から 150 名が一番高いという結果がある。これは、この規模に学生に評判の高かった授業がいくつかあったためと思われる。学年別ではすべて設問に関して 2 年次生と 4 年次生に高い評価が見られる。4 年次についてはすでに触れたが、2 年次は専門的講義科目に初めてたくさん出席して新鮮な刺激を受けたことが原因と推定される。その反動が 2 専門的知識(3.83)、3 自分で調べる姿勢(3.34)で 3 年次が最低である結果に出ている。

設問Ⅳについて。ここでも平均値は 3.88~3.99 の間に入っており、評価は高い。しかし、Ⅱ9 授業準備(4.26)に比べると、やや低い。教員の努力は認めるが、その成果はそれほどでもないということか。ところが規模別でみると 150 名以上を除くと、おおむねどの設問も 3.96 以上であり、ほとんどが 4.00 を超えている。150 名以上の規模だけが低い評価を出していて、突出している。やはり大規模授業は授業効果の点で劣っていると思われる。学年別では、4 年次生はすべての設問で 4.00 以上であり、ここでも 2 年次と 4 年次の評価が高く、3 年次の中だるみ傾向がはっきり見て取れる。

設問Ⅴについて。例年通り、問題ないことがわかった。問題は大規模授業のみ。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

教員はアンケートの結果を概ね真摯に受け止め、自分の授業を客観的に把握しようとする姿勢を持っている。その中で、所見票で目についた記述をいくつか拾ってみる。「授業準備や授業運営の努力を認めてくれることが励みになる。」「立教の学生には授業に真剣に取り組む姿勢がある。」「演習では授業と授業外で連続する持続的勉強が必要だが、その趣旨が徹底していない。」「学生の勉強時間の少なさに驚く。」「学生が表面的な勉強でよしとしている様子がある。」「文献を自らもっと深く読む習慣を身につけさせたい。」「学生の関心を惹こうとすると視覚教材に頼らざるを得ない。」「板書への不満はノートテークができないことの表れではないか。」「言語の入門科目では授業規模が問題である。」「文献を深く読み込む訓練の大切さを学生たちに徹底させることが、今最も必要であるように思われる。」

4. 学生からの意見(記述による評価)の集約

肯定的意見としては、学生の気に入った授業の良い点、教員の魅力を賛美する記述が目立った。否定的意見としては、演習科目では、発言のバランスの悪さ(特定の学生への偏り)、課題の不適切さ(過多、過少、高難度など)、講義では、規模過大、私語、板書の読みにくさ、小さな声、等が目立った。授業の充実度は学生と教員との関係性に左右されること、教員の熱意が伝わる授業に好意が寄せられることがわかる。

5. 今後の改善に向けて

具体的には教員の所見票の指定事項に対処することである。学生の学習時間を増やす必要性は多くの教員が指摘している。演習科目で適正レベルの課題を適量出す。そのチェックをきちんと行い学生にフィードバックする。試験やレポートに授業で扱わなかった発展的設問を加える。演習は 20 名、講義は 150 名以下、TA を必ず付ける、等の授業環境整備。

個々の教員の努力で解決できること以外は、大学当局に、カリキュラムの外形構築だけでなく、授業力のなお一層の向上を目指す更なる環境整備に取り組む姿勢を望みたい。

4-2 経済学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度は以下の方針で科目を選定した。

- (1)「講義科目 1 教員 1 科目」の調査は実施しない。
- (2)本年度については原則前期に実施する。
- (3)共通シラバスを用い、授業の目的及び内容にある程度の共通性があり、複数コマ開講されている科目及び積み上げ方式の 1 年次科目（それに直接接続する科目を含める場合もある）についてアンケートを実施する。

2012 年度のアンケート実施科目は、「経済学」、「経済数学入門」、「簿記」、「統計学 1」、「情報処理入門」、「経済情報処理 A」、「経済情報処理 C」、「政策情報処理 A」「財務情報処理 A」、「基礎ゼミナール 1」の 10 科目である。「学部等による設問」として、全科目に対して「教室の規模・設備の適切性」を設問し、これに加え基礎ゼミナール 1 では「経済文献を読む力」、「レジュメやレポート作成」について、情報処理系科目では「表計算ソフトの活用」、「プレゼンテーション資料の作成」、「経済・統計資料の収集」について習熟等を問う経済学部独自の質問項目を追加した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

67 の授業においてアンケートが実施された。調査対象授業の総履修者数は 3,868 名であり、その内 2,774 名が調査に回答した。回答率は 71.72%で、調査全体の平均値 (62.30%) を上回っている。アンケートに回答した学生を学年別にみると、1 年生が 2,287 名、2 年生が 273 名、3 年生が 93 名、4 年生が 63 名、不明が 58 名である。

今回の調査集計結果をみるとほとんどの項目 (29 項目中 25 項目) で 3.5 以上の平均値を示しており、総じて授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価が得られたといえる。このような結果が得られた理由の一つとして、例えば、基礎ゼミナールや情報処理系科目では年に数回の担当者会議を実施し、授業の進め方に対する意見交換や授業内容の平準化を図る等、教員サイドからの意欲的な取り組みがあげられる。

アンケート項目のうち 4.00 以上が 7 つあり (全 29 項目中)、これは昨年度の調査と同様である。この 7 つの項目には「授業全体の出席率」、「授業への積極的な参加」、「教員は授業の準備を周到に行っていた」等が含まれ、おおむね授業運営は良好に行われていると考えられる。

反対に、3.00 以下の項目は、唯一、「授業時以外に学習した時間」であり、昨年度の 2.54 から 2.64 へと若干の改善はしているものの、依然として低い数値であることには変わりはない。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

「経済学」、「経済数学入門」、「簿記」、「統計学 1」、「情報処理入門」、「経済情報処理 A」および「経済情報処理 C」「政策情報処理 A」「財務情報処理 A」、「基礎ゼミナール 1」について、科目及びクラスを 9 つのグループに区分し、グループ集計を実施した。「基礎ゼミナ

ール 1」についてはこれまでと同様、担当教員別（助教、兼任教員、助教以外の専任教員）についてグループ化した。これらのグループ化した科目は複数コマ開講されており、担当者毎のばらつきが低いことが望ましいと考えられる。

3-2 経済学（グループ8）

グループ全体で見た場合、全 24 項目の設問のうち、3.50 を超えるのが 12 項目、3.00～3.49 の項目が 10 項目となり、ほぼすべての設問が 3.00 ポイントを超えており、おおむね授業は適切に運営されていると考えられる。他方、以前から指摘されているように、クラスによる数値の差異が相対的に大きく、これが科目担当者の授業内容や方法に起因するかどうか個別に確認し対応することが必要と考えられる。

3-3 経済数学入門（グループ1）

二科目・担当教員二名で一つのグループを形成したため担当教員による数値の違いが目立つ結果となった。とはいえ、両科目とも 3.50 以上となった項目は、全 24 項目中 16 項目あり、総じて高いポイントを示しており、またグループ平均では、全 24 項目中、4.00 以上となった項目が 13 項目あるなど、十分に適切な授業運営が行われていると考えられる。

3-4 簿記（グループ9）

全 24 項目中 17 の設問項目でグループ平均は 3.50 以上となっており、4.00 以上の項目も 10 項目ある。特に、[Ⅱこの授業の進め方は…]は 9 項目中 7 項目において 4.00 以上となっており、授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価が得られたことが確認できる。他方、問題点は、クラスにより極端な差異が生じていることである。上記の「経済学」と同様、簿記においても、これが科目担当者の授業内容や方法に起因するかどうか個別に確認し対応することが必要と考えられる。

3-5 統計学1（グループ2）

二科目・担当教員二名で一つのグループを形成しているが、担当教員による数値は大きな相違はなく、類似している。平均値が 3.50 以上となった項目が全 24 項目中 12 項目であり、またほぼすべての項目が 3.00 以上となっているなど、総じて十分なポイントを示している。このことから、適切な授業運営がなされていることが確認できる。

3-6 情報処理入門（グループ3）

グループ平均でみると、全 27 項目中 4.00 以上の項目は 15 項目もあり、3.50 以上の項目を加えると、全 27 項目中 24 の項目がそれに当てはまる。これは他のグループと比べても極めて高い数値である。担当者別の数値も近似しており、クラスによる極端な差異もない。よって、授業内容と教育効果は科目全体を通じて高いレベルで達成できていると考えられる。学部等による設問も総じて高いポイントを示している。共通テキストの利用や担当者間での授業情報の共有化が効果を発揮したものと考えられる。

3-7 経済情報処理AおよびC、政策情報処理A、財務情報処理A（グループ4）

これらは情報処理系科目としてグループ化したものであるが、情報処理入門と同様に、グループ平均で全27項目中24項目が3.50以上と高い数値を示している。項目によってはクラスでやや差異が見られるが、すべてのクラスが同じ内容の科目ではないのでやむを得ない面もある。むしろ情報処理系科目が授業評価アンケートにおいて評価が高くなる傾向を示すものと考えられるべきであろう。

3-8 基礎ゼミナール1（グループ5、6、7）

全26項目の設問中、平均値が3.50以上となった設問数はグループ5および7が24項目、グループ6が23項目となり、この点では、クラス毎のばらつきがなく授業に対する満足度や教育効果に対し高い評価が得られたといえる。これは、情報処理系科目と同様に共通テキストの利用や担当者間での授業情報の共有化が効果を発揮したものと考えられる。他方、平均値が4.00以上の項目に絞ると、グループ5（助教）：13項目、グループ6（兼任教員）：7項目、グループ7（助教以外の専任教員）：17項目となり、大きな差異が生じている。特に、[Ⅱこの授業の進め方は…]や[Ⅳ総合的にみて、この授業は…]のアンケート項目における相違が顕著である。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

67の授業のうち、所見票が提出されたのは59であり、この点は昨年度よりも大幅に改善されている。なお提出されていない8の授業は、2012年度で任期終了となる助教・兼任講師によるものであり、「改善に向けた今後の方針」など、実質的に記述しにくい内容が含まれているためと考えられる。

所見票への記述量については教員により大幅な差異が見受けられるが、内容的には、板書のしかた、静粛性の確保、話し方（声の大きさ、スピード）等について改善を求める学生からの指摘については、すべての教員が次年度に向けての改善の努力をする姿勢を示している。その他の学生からの要望（出席の取り方、レジュメ配布の方法）についても可能な限り対応しようと試みている。

5. 今後の改善にむけて

従来から共通テキストの利用や担当者間での授業情報の共有化を行っている基礎ゼミナールや情報処理系科目では、クラス毎のばらつきが小さくなっているが、他方、このような共有化が行われていない科目では、クラスによる評価のばらつきが散見される。この点は従来からも指摘されている課題の一つである。

また総じて、「授業全体の出席率」、「授業への積極的な参加」、「教員は授業の準備を周到に行っていた」等の項目が全体平均で4.00以上の高ポイントを付け、他方、唯一の3.00以下の項目が「授業時以外に学習した時間」である点を踏まえると、今後は、授業時間以外に学生にいかに関心させるかが、経済学部としての大きな課題といえよう。

4-3 理学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度は、各学科の方針に基づき、科目の選定を行った。各学科とも、経年変化を調査するために、毎年なるべく同じ科目を選定する方針であり、数学科は新カリキュラム（2010年度より移行）における新規に設計した必修科目・選択必修科目を、物理学科と生命理学科は、原則として複数担当科目以外の全ての講義科目を（但し、生命理学科については教員一名あたり複数科目にならないように科目を選定）、化学科は、必修講義科目ならびに複数担当科目を除く選択講義科目を選定した。共通教育科目については、独自にアンケートを行うため実施しなかった。なお、設問項目については、理学部独自の3つの設問項目を継続した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

理学部の回答率は63.2%であり、ほぼ全学平均（62.3%）に等しい。また、回答者は、1年生1,485名、2年生1,457名、3年生1,352名、4年生193名となっており、昨年度と比べて3年生の回答者数が増加し、その結果1～3年生からほぼ満遍なく回答が得られた。約7割の学生が、授業に積極的に参加した（I2）に「大いにそう思う・そう思う」と答えているが、十分な準備（I3）や授業をきっかけにした発展的な勉強（I4）で「大いにそう思う・そう思う」と答えた学生は4割にも満たず、やや受け身の学習傾向が見える。出席率（I1）が90%以上の回答者が全体の74%を占めるのに比して、授業時以外に学習した時間（I6）が3時間以上の回答者はわずか7.6%であり、1時間未満または0時間が53%を占めており、授業には出席するが、それが自主的な学習に結びついていない学生の姿が浮かび上がる。

2011年度の理学部のデータと比較すると、静肅性（II5）を除く、II～Vの項目はポイントが上昇している。上昇の度合いが小さい設問もあるが、全体的に評価が上昇していることは特筆に値する。特に、総合的な評価の設問である、わかりやすい授業だった（IV1）は0.12ポイント上昇しており、教員の努力の現れであると考えたい。

学科別で差が見られる項目を挙げると、授業への取り組み方（I1～I6）に関しては、概して数学科のポイントが高い。但し、発展的な勉強（I4）は物理学科が最も高く、生命理学科が最も低い。授業の進め方（II1～II9）に関しては、5つの設問について生命理学科の評価が、4つの設問について数学科の評価が高かった。授業から得ることができたもの（III1～III4）のうち、現代に通じる普遍的な意味（III4）以外の設問に関しては、数学科の評価が高く、化学科の評価が低かった。総合的な評価（IV1～IV4）でも、数学科と生命理学科の評価が高い傾向であった。理学部独自の設問のうち、教員の質問への応答（V1）、学生同士の共同の勉強（V3）に関しては、数学科の評価が特に高い。一方、高校までの授業スタイルとの違いを考慮してくれた（V2）は、化学科と生命理学科が高く、数学科が最も低かった。但し、1. に述べた通り、数学科のアンケート実施科目（8科目）は、新カリキュラムに対応して新規に設計した科目に絞っており、より多くの科目でアンケートを行った他学科との単純な比較は難しい面がある。

学年別の比較では、出席率（I1）は学年経過に従って徐々に低下することを除くと、それ以外のほとんどの項目において、学年の進行につれてポイントが上昇していた。この点には、

高学年になるにつれて授業内容の理解度が高まっていることが反映していると思われる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

高い評価を受けている項目が多いことから、多くの教員が学生からの授業評価が概ね良好だったと認識していた。一方、学生の授業時以外の学習時間の少なさや、自主的な学習への取り組み意欲の低さへの懸念が、多くの教員から指摘されていた。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業で用いる資料（レジュメ、映写するパワーポイントの図）の改善、板書方法の工夫に関する記述が多かった。授業の進度が「速い」という意見と「遅い」という意見が同時にだされ、どちらに合わせるべきかに苦慮する声も聞かれた。静粛性の維持や声量などに関する要望については、改善を検討する旨の記述があった。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

内容が難しい、多すぎるという評価に対して、いかにして授業内容の質を落とさずに、学生の理解度を上げるかに関して、様々な改善策（前回の振り返りを冒頭で行う、具体的な例を多く示す、重要事項は繰り返して教える、効果的な資料を配布する、動画を用いて説明する、CHORUSを活用する等）が述べられていた。学生の自主的な学習を促すために、対話形式を取り入れる、小テストを実施する、のような改善策の言及があった。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

説明が丁寧でわかりやすいという評価や、板書の仕方、レジュメやパワーポイントの効果的な使用、理解を助けるための例題の提示について肯定的な意見が多かった。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

授業内容が難しい、多い、進度が速いという意見が多かった。板書が見えにくい、板書の量が多すぎる、声が小さいという意見も見受けられた。

5. 今後の改善に向けて

授業の出席率が高いが、授業以外での学習時間が極度に少ないという現状をどのように改善するかが大きな問題である。学生が自ら積極的に学びに取り組むようになるような工夫・対策が教員に求められている。短い授業時間内に重要な内容を的確に学生に伝えるために、学生の注意を惹きつける資料、話し方の工夫、CHORUS等を用いた補充などが重要になるだろう。また、授業評価アンケートは授業期間の最後に行うが、学生の要望にきめ細かく対応するために、授業期間の前半にも簡単なアンケートを教員が各自で行うことも一案であると思われる。さらに、理解度に幅がある多様な学生をひとまとめにして教えることには限界があるため、演習などの授業で理解度別にクラス分けをすることも考慮しても良いと思われる。

4-4 社会学部

1. 科目選定方針とねらい

社会学部では、2012年度に新カリキュラムを導入したことを受け、授業評価アンケート対象科目の選定方針を以下のように定めた。

- ①必修科目は全て実施する。
- ②講義科目については、科目の種類を問わず、「年間1教員1科目」となるように選定作業を行う。
- ③産業関係学科の科目は実施しない。

新カリキュラムでは従来学科別に行われていた初年次、2年次の必修科目を学部共通の必修科目と位置づけ、これまで以上に社会学の基礎教育の充実を目指すことになったため、これらの科目に対する学生の評価は、今後の基礎教育のさらなる充実に向け重要な意味を持つ。①については、2011年度までは「必修・選択必修の講義科目は、原則としてすべて実施する」というやや緩やかな方針をとっていたが、2012年度は基礎教育を重視するカリキュラム改訂の実施を踏まえて、必修科目は全て実施するという変更をおこなった。

②は基本的には2007年度以降の選定方針を踏襲しているが、必修科目を担当している教員の希望があれば他の科目の実施（つまり、2科目実施）も認めることにした。

③は、産業関係学科は2006年度からの学部再編において学生募集を停止しているという理由によるものである。

2. 集計データにみられる結果

2-1 授業規模別

大規模授業の最大の問題点は「私語の問題」であろう。この点をとらえた設問「Ⅱ5 十分な静粛性が保たれた」は、50名以下では4.41（前年度は4.54）、51～100名では4.04（同3.94）、101～150名では3.56（同3.60）、151名以上は3.40（同3.27）と履修者数が増えるにしたがって評価が下がるという相関関係が見られるが、前年度と比較すると若干の改善傾向が示されている。

その他の設問に関しても、大規模授業であるほど「Ⅰ4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」「Ⅲ3 自分で調べ、考える姿勢（を得ることができた）」「Ⅳ4 この授業を受けて満足した」の設問で評価が低いという関連が見られる。

2-2 学年別

2011年度と同様に、授業出席率は学年が進むにつれて低下しているが、その他のほぼ全ての設問について学年が進むにつれてスコアが高い傾向が見られる。特に、カテゴリⅢ「この授業から得ることができたもの」の中で設問「Ⅲ1 自分にとって新しい考え方・発想」は1年生3.64（前年度は3.61）、2年生3.72（同3.75）、3年生3.85（同3.80）、4年生4.01（同3.97）、および設問「Ⅲ4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」は、1年生3.57（前年度は3.52）、2年生3.67（同3.66）、3年生3.82（同3.83）、4年生3.97（同3.96）であり、一貫して学年が上がるほどスコアも高くなっている。大学で

の勉学を通じて、学問のもつ意味・魅力への理解が深まっているようである。

2-3 学科

授業に対する総合的な評価を表していると考えられる設問「IV4 この授業を受けて満足した」は社会学科 3.95（前年度は 3.84）、現代文化学科 3.67（同 3.65）、メディア社会学科 3.88（同 3.72）である。ほかの項目についてもおおむね社会学科、メディア社会学科、現代文化学科の順にスコアが高い傾向が示されている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

担当教員による所見票の記述は膨大な量と内容をもつため、全体像をとりまとめるのは難しいが、おおむね教員が予想した結果と一致するとの意見が多かった。特に、設問「II5 十分な静肅性が保たれた」および設問「I4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした」については大規模授業の担当教員を中心に問題があるという意見が多く寄せられている。

また、「I6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」の短さに驚くという意見も共通して多く寄せられている。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

前項と同様に、多様な科目に対する学生からの記述による評価の全体像をとりまとめるのは難しいが、前年度最も多かった「授業の静肅性が保たれない」ことへの苦情と並んで、2012年度は「授業時間内に授業が終わらないのは困る。延長しないでほしい」という苦情も目立った。また、「用いるデータが古いので新しいデータを提示してほしい」「参考書を紹介してほしい」という要望も比較的多く出されている。

肯定的な評価に関しては、わかりやすいレジュメの工夫、映像資料の活用といった「教材」に関するものと、説明のわかりやすさ、各回の授業の狙いの明確さなどの「授業のわかりやすさ」についての記述が最も多かったが、教員の人間的魅力や学生への細やかな配慮に対する肯定的な評価も多く見られた。2011年度は少数ではあるものの、教員に対する誹謗中傷とも受け取れるコメントがあったが、2012年度はそのような記述は見られなかった。

5. 今後の改善に向けて

授業規模に起因する私語の問題への対応や、学生の主体的・積極的な発展的学習への動機付けの必要性については学部 FD 委員会でも重要課題として認識されているので、具体的な改善方策を引き続き検討していきたい。

また、学部独自の試みとし 2 年生を対象に「2012 年度基礎演習社会学部共通科目「基礎演習」アンケート調査」を 2013 年 5 月に実施した。この調査の結果（自由回答も含む）を本アンケートの結果とあわせて学部 FD 委員会を通じて学部教員で共有しつつ、新カリキュラムの進展にあわせて、さらなる授業改善が図れるように努力していきたい。

4-5 法学部

1. 科目選定方針とねらい

法学部では、2011年度より、全教員（専任・兼任）について授業評価アンケートを行うのは3年に1回とし、それ以外の年度は、本学で初めて授業を開講する教員およびアンケートの実施を希望する科目を対象に行うことにした。2012年度は、それ以外の年度に該当し、合計16科目について授業評価アンケートを行った。

毎年度の全教員についての授業評価アンケートの実施をとりやめたのは、授業評価アンケートも回を重ねるにつれて、アンケート結果に対して授業改善に取り組むという姿勢が浸透しているため、3年に1回のアンケートで、学生からの意見のフィードバックとしては十分であると考えられたためである。

2. 集計データから見られる結果のまとめ

回答率については、46.74パーセントで、全学平均の62.30パーセントに比べると低い。演習科目を対象としておらず（基礎文献講読については、独自のアンケートを行っている）、講義科目のみがアンケートの対象となっていることも影響しているであろうが、出席率を上げるための対策が必要である。

設問項目別の平均値をみると、平均値3以下の項目として、I3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(2.98)、I6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」(2.34)があった。また、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」も平均値が3.01と比較的低い数値を示していた。これも例年と同様の傾向であり、学生の受動的な態度が見て取れる。例年通りではあるが、大人数授業が多い中で、どのようにして学生を主体的な学習へと促すかという点が課題である。

学年別平均値をみると、これまでと同様に、II「この授業の進め方は…」・III「この授業から得ることができたもの」・IV「総合的にみて、この授業は…」いずれについても、学年が上がるごとに平均値が上昇する傾向にある。大学の授業に慣れ、さらには知識が増すにつれて理解度も高まっていることを示していると考えられる。特に学年ごとの差が顕著なのは、II5「十分な静粛性が保たれた」であり、1年生は3.52であったのに対して、2年生以上では、4.4から4.5という値を示している。大学での授業のやり方に、次第に慣れてきたことを示しているのであろう。I5「シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った」も、1年生のみ2.9台で、他の学年は3.3から3.6という値を示している。これも、シラバスの見方について、次第に慣れてきたことを示すものであろう。3・4年生の就職活動の影響は、I1「授業全体を通じての出席率」について、3・4年生の値が低くなっている点が目につく（1・2年生が4.5から4.6台であるのに対し、3年生は4.37、4年生は4.00）。ただし、学生の授業への取り組みに関するI2「この授業に積極的に参加した」・I3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」・I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」いずれについても、2年生から4年生の間で顕著な値の差が見られない。3・4年生も時間的制約がありながらも、学業に対する関心自体は失われていないと評価できようか。

設問項目間の相関も、参考になる。IV4「授業の満足度」とI1「出席率」・I3「履修にあたっての準備」・I6「授業時以外の学習時間」との関連性が弱いというデータが示され

ていた。この点は、評価が分かれるであろうが、講義科目のみがアンケート対象であり、どちらかという試験前の復習中心となるため、アンケートをとる時点では本格的に復習を開始していなかったことを示しているのではなかろうか。

3. 担当教員からの所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

ほぼ全教員が、学生の評価を真摯に受け止め、今後の授業の参考にしたいとしている。所見の中で比較的目立ったのは、より高度な内容を伝えるために、より多くの情報を与えるべきか、それとも基本的な事項に絞った形で講義を行うか、という点について、どちらの選択肢を選んでも、学生からは他方の選択肢をとるべきだという反応があった点である。学生のニーズが多様であることがうかがわれる。また、学生への自発的な学習を促すことができなかったという記述も目立った。講義形式の授業でどのような対応が効果的なのか、教員間でも積極的に情報交換をする必要があるように思われる。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

学生の要望に対して、積極的に改善を約束する回答がほとんどであった。レジュメのありかた、パワーポイントの見やすさ、板書の見やすさなどについての回答が多くあったが、とりわけ兼任講師の先生方が、履修者数が予想と異なり多かったことに伴う戸惑いがあったことが見受けられた。スムーズに本学の授業環境に慣れていただけるよう、サポートする仕組みが必要であろう。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

ほぼ全教員が、学生の要望を汲み取る形で、今後の方針を示している。具体的な点については、多くの教員が、3-1「授業評価に対する担当教員の所見」、3-2「記述による評価に対する担当教員」をまとめた形で3-3「改善に向けた今後の方針」を書いているので、特に付け加えるべき点はない。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

肯定的評価の記述としては、具体例が多くわかりやすかった、内容が興味深かったという意見が多い。教員の所見票では否定的意見に対する対応が多いが、実際には、どの授業も肯定的な意見が多くあったことを強調しておきたい。レジュメに関しては、情報量の多さを評価する記述と、大きな流れが示されていることを評価する記述、双方が見られた。レジュメにどのような位置づけを与えるかは大変難しい問題であり、扱うテーマや配当年次などによっても異なるのかもしれない。また、リアクション・ペーパーなど、学生の疑問点やニーズをこまめに把握する方策についても、評価が高かった。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

教室の大きさと受講生数のミスマッチ、話す速さ、声の大きさ、板書の量といったテクニカルな内容が多い。また、講義形式の授業でも双方向型の対話を望む意見がある一方で、

当てて欲しくないという意見もあった。否定的評価でもレジュメに関する記述が多かったが、肯定的評価の裏返しなので、ここでは繰り返さない。なお、マイクの音量についても学生から注文が多くあったが、授業の終盤に行われる授業評価アンケートに書くのではなく、早急に教員に告げるべきであり、教員も授業の早い段階でこの点に留意をする必要があろう。

5. 今後の改善に向けて

今後の課題として、教職員の努力により改善が可能な以下の点を挙げておきたい。

- ・兼任講師、とりわけ初めて立教での授業を担当する兼任講師の先生にスムーズに、教員・学生双方が気持ちよく授業ができるよう、問題がある場合には早期に解決できるような工夫を行うことが必要であるように思われる。
- ・学生に主体的・自発的に学ぶことができるよう、講義形式の授業でも工夫が必要であると思われる。受講生が多い中で双方向型の授業を行うためのノウハウや、情報量が多いレジュメを作る際の短所の克服方法、情報量を絞ったレジュメを作成する際に授業でどのようなことに留意すればいいかなどの情報を、教員間で共有することも一つの対策となろう。

4-6 経営学部

1. 科目選定方針とねらい

経営学部は、例年通り、2～4年次演習を除くすべての科目において実施した。「学生による授業評価アンケート」の結果は、授業を担当する教員に対して重要なフィードバック効果をもたらし、授業の質を高めるのに寄与するものと考えているからである。このため、可能であれば、今後も、演習を除く全科目を対象に授業評価アンケートを実施していきたいと考えている。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

学生側の授業に対する取り組みを示す6項目については、「授業全体を通じての出席率」は4.67、「この授業に積極的に参加した」は4.02とそれぞれ高い数値を示し、積極的に授業に取り組んでいたことがうかがえる。一方、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.53)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.46)、「シラバスは受講に役立った」(3.43)は、相対的に低い。昨年度と同様、シラバスの記述については字数に限りがあるが、その範囲内で、学習計画等に役立つ内容にしていく努力が引き続き必要となる。特に問題となるのは、「授業時以外に学習した時間」(2.66)であり、2時間未満の学生が大半であることを示している。授業への積極的な参加は見られるものの、予習・復習などへの意識は必ずしも高いとは言えない結果であった。

授業の進め方については、「板書の仕方が適切だった」の平均3.72が最低であり、他のすべての項目は3.9以上という高得点であった。板書については、教員側の工夫も必要であるが、最近、プリントやレジュメの配布を当然と考える学生が増えてきており、板書が不得手となっていることとも関係があると推測できる。授業の進め方については、全体として学生から一定の評価を得ているといえよう。一番高かった「教員は授業の準備を周到に行っていた」については、4.25という高い評価を得ている。学部として、現状に満足せず、今後も努力していく必要がある。

授業から得られたものを示す4項目についても、いずれも3.7以上であった。中でも、「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」が最も高く4.01で、「自分で調べ、考える姿勢」が最も低く3.71であった。しかしこの項目について、授業規模別に見ると、50名以下が4.12と高く、またグループ集計を行ったリーダーシップ入門、BL1、BL2といった演習系科目の平均においては最低でも4.04と高くなっている。このことから講義系科目においては当該項目の評価が相対的に低かったといえる。確かに、講義系科目や規模の大きい科目において自ら調べ、考える姿勢を養うのは難しいが、このような姿勢を養成するための工夫が求められる。

総合的にみでの評価では、「学問的興味をかきたてられた」が3.87で最低点であり、他の項目は3.9以上であった。その意味では学生の満足度は全体的にみてもある程度は満たすことができていると評価できる。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

経営学部では、リーダーシップ入門、BL1、BL2の3科目についてグループ集計を行

った。理由は、これらの科目が複数コマ展開されており、それぞれ担当教員は違うものの、同一のフォーマットによって開講されているからである。従って、これらの科目については、担当者ごとのばらつきが低いことが望ましいと考えている。

3-2 リーダーシップ入門

授業への取り組みに関する項目のなかで、「授業時以外の学習時間」をみると、4.23 と高く、多くが 2~3 時間以上を勉強しており、授業外での活動が活発に行われていることがうかがえる。総合的評価の 4 項目は、18 クラスの平均値がいずれも 4.4~4.6 と高い評価を受けている。出席率で 5.0 と最高得点も出ており、学生の積極的参加の様子が見られる。「学問的興味をかきたてられた」は 4.44 と高い評価であったが、3.85(2 クラス)と比較的低い評価もあり、若干の差がクラスにより生じていることがうかがえる。「この授業を受けて満足した」については、すべて 4.0 を超える高い評価であった。

3-3 BL1

授業への取り組みに関する項目のなかで、「授業時以外の学習時間」をみると、3.19 と低かった。最も高いクラスが 3.67、最も低いクラスが 2.72 となっており、演習系科目としては低い値であり、クラスの差も大きくなっている。リーダーシップ入門で見られたような活発な授業外学習はあまり見られていない。総合的評価の 4 項目は、12 クラス平均値がすべて 4.0 以上であり、高い評価を得ているといえよう。その中で、「学問的興味をかきたてられた」(4.04)のクラス別分布をみると、4.42 という高評価のクラスがある一方、4.0 未満のクラスが 5 クラスあり、3.67 が 2 クラスあり、決して低い評価ではないものの、評価のばらつきがみられた。「この授業を受けて満足した」は 4.20 と高い評価であったが、ここでも最も高いクラスでは 4.69 (1 クラス) である一方、最も低いクラスは 3.56 (1 クラス) と、差があったが、10 クラスが 4.0 を超えており、全体として高い評価を受けたといえる。

3-4 BL2

授業への取り組みに関する項目のなかで、「授業時以外の学習時間」をみると、3.64 で 1 時間以上の授業時以外で勉強をした割合が 8 割を超えている。最も高いクラスで 4.00、最も低いクラスで 3.08 と差が出ている。総合的評価の 4 項目は、10 クラス平均値がすべて 4.3 以上であり、高い評価を得ているといえよう。また、4 項目中の「この授業を受けて満足した」については、10 クラス平均で 4.38 と高い評価を得た。クラス別にみると、一番高いクラスで 4.68 (1 クラス) であり、一番低いクラスで 3.64 (1 クラス) と差があったが、9 クラスは 4.0 以上と高く、全体としては、高い評価を得ているといえる。

4. 今後の改善に向けて

総合的評価をみると比較的高い評価を得ているが、演習科目に比して講義系科目の評価は相対的に評価が下がる傾向がみられる。具体的に総合評価について、4 つの設問項目すべてにおいて、講義の規模が大きくなるにつれて、評価が落ちる傾向にある。とりわけ授業規模の大きな講義についての対策を検討する必要があると考える。逆に、例年、「十分な

静肅性が保たれた」の設問の評価は講義規模が大きくなると低くなる傾向があったが、2012年度は、50名以上でも3.8を上回り、比較的高い評価となっており、これまでの努力の成果が少なからず出ているものと推測できる。

また、学生側の授業に対する取り組みを示す6項目について、「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」(3.53)、「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」(3.46)が相対的に低い。さらに授業時以外での学習時間が2.66と極端に低い値になっている。この項目について、演習系科目をみれば、この数値よりは高い値を示しており、特にリーダーシップ入門に関しては授業時以外の積極的な学習活動がなされていることがわかるが、BL1では演習系の中では比較的低い数値となっている。これらの数値から、授業時には積極的に参加をするが、それ以外の時間では学問から離れてしまっている様子がうかがえる。授業以外でも自発的に学習する意欲を引き出す教員の工夫とともに学生の意欲的な学習姿勢も期待したい部分はある。

4-7 異文化コミュニケーション学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度は、1年生必修科目のうち、講義科目6科目を対象とした。「コミュニケーション入門」、「地域・文化研究入門」、「言語学入門」は、前・後期で科目担当者が異なるため、授業の目的を担当者同士で共有しながら開講している。この点について、学生の評価と意識を確認することが目的である。また、学部専門教育の基盤となるべき必修講義科目について、カリキュラムの検証を行うことが目的である。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

実施状況としては、必修科目ということもあり、回答率が平均88%と、全体平均の約62%をはるかに上回る数値となっている。

次に、設置項目別平均値について、各大項目別に述べる。まずは授業への学生の取り組みについてであるが、出席率と授業への積極的参加については高い数値を示しており、多くの学生が授業には前向きな態度で参加していることがわかる。しかし、授業時間時以外に学習した時間についての回答を見ると、1時間未満と回答した学生が7割強で、かつ授業後の発展的学習についての肯定的な回答は必ずしも高くない。授業の進め方については、映像視覚教材の使用、教員の授業の周到さ、授業内容の明確さ、ねらいの明確さ等で半数以上の学生が肯定的評価をしている。授業から得たものについても肯定的評価が多いが、自分で調べ、考える姿勢についてのみ、やや評価が低めである。総合的評価においても6割以上の学生が、授業内容に満足し、7割の学生がわかりやすかったと回答している。

3. 各科目の前・後期の比較

2012年度のアンケートを実施した6科目について、カリキュラム検証のために前・後期の比較を行った。

3-1 コミュニケーション入門

「コミュニケーション」の概論的な論文を読み、授業内でのディスカッションを通して、知見を身につけ、自ら考察する力をつけることをめざしている。また、1年生の必修科目「基礎演習」の内容とも連動して、基本的なレポートの書き方等についての指導も行った。前・後期の授業評価を比較すると、後期に、学生の出席率自己評価が下がってはいるものの、専門知識を得ることができ、自分で考える姿勢が身についたという点において、おおよそ同様の評価がされている。

3-2 言語学入門

前期は兼任教員、後期は専任教員が担当したが、授業内容、目的については、綿密に連携を取りながら開講されている。「言語学」全般について、身近な例を示しながら、「ことばを科学」するための理論を紹介しているが、映像資料等を用いた提示や説明のわかりやすさが、どちらの授業でも、高く評価されている。一方、自ら学ぶ姿勢、発展的な勉強については、やや自己評価が低く、今後の課題といえる。

3-3 地域・文化研究入門

本講義は、具体的に一つの文化圏を扱いながら、地域・文化研究の方法論の基礎を学ぶことを目的としている。この目的を共有しながら、前期担当と後期担当の教員は、それぞれの研究対象である地域の例を中心に講義を展開している。また、導入科目であることを考慮し、ノートを取り方、論点の見つけ方についても意識化させることをめざした。映像視覚教材の用い方等については、前・後期とも高く評価されており、また、学生のリアクションペーパーへの対応も、記述回答で高く評価されている。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

出席率や理解度の高さについては、教員もおおむね同意し、満足している。一方、一部の授業について、静粛性が保たれていないこと、また、ほぼすべての授業において、発展的な勉強、自分で考える姿勢といった項目についての評価がやや低いことへの対応が、今後の課題としてあげられている。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

パワーポイント等の視覚教材の用い方について、わかりやすいという評価と同時に、情報量が多かったり、切り替えが早かったという記述を受けて、今後の対応の必要性が確認されている。一方、教育的意図から、あえて空欄を設けて教材を提示したが、その意図が学生に十分理解されていなかったという指摘があった。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

導入科目に特有な問題として、「わかりやすさ」と「厳密性」、「専門性」との両立の難しさが指摘されている。また、講義科目においても、学生が積極的に参加できるようなグループディスカッション等を導入する必要性もあげられている。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

授業のわかりやすさ、パワポ資料の効果のほか、講義内でのグループディスカッション、授業内での小テストやクイズといった、学生が積極的に講義に参加する仕掛けについて、多くの肯定的な意見が寄せられている。また、教員の学生の意見への対応（リアペへのコメント、質問への対応など）についても高い評価が見られる。

5-2 「否定的評価として多い意見の集約」

視覚教材について、切り替えが早すぎるという指摘がいくつか見られる。「地域・文化研究入門」については、講義で扱われる地域が、学生の関心と必ずしも対応していない場合があり、それに対して不満の声がいくつか見られた。

6. 今後の改善に向けて

今後の課題としては、授業外でどれだけ学習を促すかが主なものとして挙げられるだろう

う。毎回の授業の予習を必要とするようなシラバスと、発展的学習を促す授業内容・方法の工夫が重要となるだろう。また、「地域・文化研究入門」の講義内容については、2013年度から見直しを始めているが、さらなる検討が必要である。

4-8 観光学部

1. 科目選定の方針とねらい

次のような方針で授業評価アンケートの実施科目を選定した。

- (1) 原則としてひとりの教員に1科目以上を対象とする。
- (2) 学部専任教員に関してはすべての担当科目を対象とする。ただし、「***1」「***2」をペアで担当している場合には、「***1」のみを対象とする。
- (3) 専門演習、実験、実技を伴う科目は対象としない。
- (4) 複数教員担当科目は対象としない。
- (5) 集中講義は対象としない。

2. 集計データに見られる結果のまとめ

設問の平均値を見ると「授業全体を通じての出席率」は4.50、「この授業に積極的に参加した」は3.92であることから、授業への学生の参加自体は高いと言える。しかし「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」については2.14を少し超える程度であり、1時間未満の学生が約7割を占めている。また「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」も3.18と比較的低い値である。両項目ともに、1年次と2年次以上では平均値に開きがみられ、とくに1年次に対して、予習復習や発展学習の確保が観光学部としての課題と言える。しかし、「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」の平均値は、2年次が3.21、3年次が3.27、4年次が3.29となっており、学年が上がるごとに遞増している。上級生対象の授業に関しては、予習復習や発展学習についての課題も克服される傾向にあるといえる。

授業の進め方については、全体的に高い評価が得られた。各項目をみると、概ね大人数クラスになるほど平均値は低くなるが、「教員は授業の準備を周到に行っていた」についてはクラス人数の大小による差があまり見られず、平均値も4.28と高い値となっている。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

出席率や教員の準備などに対する評価項目の高さから、多くの教員が学生からの授業評価が概ね良好だったと認識しており、授業準備に時間をかけたことが正当に評価されている旨の指摘も複数見られた。その一方、「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」と「この授業をきっかけにして発展的な勉強をした」については、評価の低さを指摘する教員が多かった。これらの点に対しては、CHORUSに授業関連資料をアップロードしたり、グループワークの時間を設けたり、業界の最新情報を提供したりするなどの工夫を取り入れたいとする教員が多かった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

要望や意見としては、配付資料を詳しくしてほしい、パワーポイントの提示が早くメモできない、などが多く指摘され、所見からは、そうした学生の要望や注文を拾い上げて、授業改善に繋げていこうとしている姿勢が伺える。また、(マイクの機能が十分ではないために)声が聞き取りにくい、教室の奥行きがあるので後方の学生から板書が見えにくい、

冷房が効きすぎるなど、教育環境についての指摘もあり、改善できる指摘に対しては速やかな対応が望まれる。本学ではカラーコピーのサービスがないので自前で教材を印刷しているという兼任講師からの指摘については、全学での検討が必要と思われる。

プラスの評価に関しては、パワーポイントなど視覚教材の有効性の高さについての指摘が多く見られたこと、ゲストスピーカーの評価が高かったことなどが目立った。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

受講生数が多くなると教員から学生への一方通行になりがちで、静粛性も保ちにくい。しかし、100名や200名を超えるような大人数の授業であっても「考える」機会を意識的に増やそうとしている授業もみられる。配付資料を作り込み、映像視覚教材を活用する授業もある一方で、資料を配付せずに学生に板書をまとめさせるスタイルで学生の集中力の維持と理解の促進をねらう授業もある。そうした授業スタイルによる教員の意図を学生にうまく理解させることが、授業の理解度と評価を向上させるために必要である。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

配付資料やパワーポイントがよく準備されている、具体的な例示が効果的で理解しやすかった、研究や調査に必要な知識が得られた、就職活動に役立つ内容だったなど。ディスカッションの導入やゲストスピーカーの授業は概ね高評価である。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

声が聞き取りにくい、パワーポイントを書き写すのが精いっぱい聴くことに集中できない、レジュメに書きこむスペースが少ない、レジュメをCHORUSにアップしてほしい、冷房が効きすぎるなど。

5. 今後の改善に向けて

観光学部の大きな課題は、大規模クラスの授業が多い1年次における、予習復習や発展学習時間の確保である。大人数の授業であっても、授業内でグループによるディスカッションを取り入れたり、学生に発表させたりすることを通して、学生に「考える」習慣をつけさせようとしている授業は概ね高い評価を得ているため、1年次においても、そうした視点の導入の検討が望まれる。

また、総じてゲストスピーカーの評価が高かった。観光学には実業界や観光の現場と密接に結びついた講義が展開できるという利点があるので、今後もゲストスピーカー制度を積極的に活用していきたい。

4-9 コミュニティ福祉学部

1. 科目選定方針とねらい

2012年度の科目選定の基準は、以下の通りである。(1)1教員1科目以下の実施を原則とする、(2)資格科目を優先する、(3)演習科目は対象外とする、(4)昨年度実施科目を優先する。この結果、実施科目は延べ100科目となり、アンケートが実施された。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

総合評価（質問項目Ⅳ）とその他の設問項目との関連は次のようなものであった。まず、「授業のわかりやすさ」（質問項目Ⅳ1）および「授業目標の明確さ」（質問項目Ⅳ2）は、「授業のねらいの明確さ」（質問項目Ⅱ3）と「授業内容の明確さ」（質問項目Ⅱ4）との関連が強かった。

次に、「授業の満足度」（質問項目Ⅳ4）は、「授業への取り組み方」（質問項目Ⅰ2、Ⅰ4、Ⅰ5）、「授業の進め方」（質問項目Ⅱの内5を除く全項目）、「授業から得たもの」（質問項目Ⅲの全項目）と、比較的強く関連していた。一方で、「出席率」（質問項目Ⅰ1）や「履修にあたっての準備」（質問項目Ⅰ3）、「授業時以外の学習時間」（質問項目Ⅰ6）、「授業の静粛性」（質問項目Ⅱ5）との関連は低かった。

授業への取り組み方（質問項目Ⅰ）についてみると、昨年より若干の改善傾向がうかがわれるが、授業時間以外の学習（質問項目Ⅰ6）の平均値は、2時間に満たない学生が89.6%となっていた。

また、授業をきっかけにして発展的な勉強をしたという回答も、約35.7%に留まっていた。学生に主体的・自律的学習を促す対策を講じる必要があると考えられる。

授業の進め方（質問項目Ⅱ）についての評価は、ほぼ全ての項目で比較的高かったが、板書の仕方についてのみ、やや低い評価であった。また、総合的な評価（質問項目Ⅳ）については、改善の余地は残されているものの、全項目で高い傾向にあった。

3. グループ集計にみられる結果

3-1 グループ集計の分類

前期・後期共に、①専門関連科目②学部共通科目③福祉学科科目④コミュニティ政策学科科目⑤スポーツウエルネス学科科目のグルーピングを行い、集計を行った。

授業に対する総合的な満足度（質問項目Ⅳ）については、学部全体でみると、学年が進行するに従って高くなっていく傾向がうかがわれる。これに対し、グループ毎の平均値の比較では、グループ間における顕著な差異や特色は、今回特に認められなかった。

4. 担当教員の所見票に対するまとめ

4-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業目的に照らして、また、総合的な満足度の評価結果等から、「概ね妥当な評価である」とのコメントが寄せられた。一方、「受講生の授業参加意欲をどう高めることができるか」等学生の主体的な学習意欲を涵養する取り組みが課題と指摘する意見も多く、応用力を身につけられるような工夫も行いたい、との記述もみられた。

4-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

昨年度と同様に、授業環境（静粛性を含む）、授業内容（教授法、評価法、難易度）についての学生の記述による評価に対する所見が多くみられた。前者については、全般的に学生自身の自覚を促す内容が、後者については、学生の記述を今後の授業改善等に活かしていきたいという内容が主なものであった。

また、受動的な態度ではなく、学生自身が学ぶ「主役」となること、自ら考え意見表明することなど、この点からも学生に主体的な学習態度を期待する記述がみられた。

4-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

学習意欲が低下していると思われる学生に対しても、「よりアトラクティブな内容・授業方法を考えようと思う」など、全体的に学生の状況に応じて、意欲的に改善に取り組もうとする見解が多く述べられている。

5. 学生からの意見（記述による評価）の集約

5-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

映像教材の使用や経験豊富なゲストスピーカーの招請、学生同士のディスカッションの機会の導入、使用教材の工夫など、学生が多角的に学べるようきめ細やかな配慮をしている講義、授業準備を周到に行い、熱意を持って授業に臨む教員の姿勢に対して、多くの肯定的評価がみられた。具体的には以下のようなものがあった。

- ・知識の幅、視野を広げる事ができました。専門性がとても高く、深く学ぶ事ができます。
- ・この授業でいろいろなことを考えてみるようになり、もっと深く考えてみるきっかけにもなった。

5-2 「否定的評価として多い意見の集約」

昨年度と比べると、大規模教室における私語に関する否定的意見は目立っていないが、これは、今回の対象講義の内 151 名以上の大規模クラス授業が 3 科目のみであったことが影響している可能性がある。その他教室環境（スクリーンの大きさ等）、資料提示方法及び内容（配布資料の多寡やまとめ方、板書や説明が早すぎる等）、出席の取り方の公平性等について、否定的な意見が若干見られた。

6. 今後の改善に向けて

- ・授業時間外の自主的学習について：昨年に引き続き、準備学習等課題の提示や自主的学習を促している授業方法を共有する。
- ・履修者数の多い授業について：抽選等による履修者数の制限の検討及び適正規模の教室配当等を引き続き配慮する必要がある。

4-10 現代心理学部

1. 科目選定方針とねらい

本学部では、以下の方針により授業評価アンケート実施対象科目を設定した。

- (1) 学部専任教員が担当する「学部共通選択科目」(旧カリ「総合展開科目」全科目)
- (2) 学部専任教員が担当する「初年次教育科目」
- (3) 学部専任教員が担当する「講義科目」及び「共通シラバスにより展開される一部の科目」

学生による授業評価アンケートの目的は、以下の7点である。

- ① 教員が自らの授業改善を目指す自己研修の資料を得る。
- ② 教員同士が授業に関して相互研修をおこなう機会を提供する。
- ③ 学生の学習姿勢を知るための資料とする。
- ④ 学生の授業への期待のありかを知る資料を得る。
- ⑤ 学生に授業履修への積極性と責任意識を喚起する。
- ⑥ 学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定するための資料を得る。
- ⑦ 大学としての教育力向上に必要な方策を立てるための資料を得る。

現代心理学部では、学部専任教員のFDという観点から、専任教員の担当する学部教育の基幹となる科目を選定する方針とした。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

今回の回答率は、約56.9%であり、前年から1.6%下がっており、大学全体の平均よりも5.4%低い。この数値は、回答率というよりも、授業への出席率を反映している可能性が高い。学生の自発性を重んじる教員が多いという当学部の特徴が数値として表れているのではないと思われる。

学部における傾向を見ると、「Ⅰ(授業への取り組み方)」については、授業への出席率90%以上という回答が6割以上であるのに対して、授業時以外に学習した時間は1時間未満にとどまっている学生が多く、事前、事後の学習はあまりなされていないという結果だった。従って、出席だけするという表面的な取り組みをしている学生が多いと推測されるので、より深く積極的な学びを促進する工夫が教員に課された課題であるといえよう。「Ⅱ(授業の進め方)」についての学生の評価は、全体的に高かった。特に、教員の授業の準備や映像視覚教材の使用についての評価が高く、後者については、この学部の特性も反映されていると思われるが、効果的な授業運営については各教員の努力の成果がみられるといえる。「Ⅲ(学生がこの授業から得ることができたもの)」についての学生の自己評価も全体的には高いが、自分で調べ、考える姿勢がやや低く、この結果は、「Ⅰ6(授業時以外の学習時間)」が低かったことと対応しており、知識の伝達にとどまらず、学生自身の自ら学ぶ力を育成することを、教育目標として教員が意識することが課題であると考えられる。「Ⅳ(授業への総合評価)」については、概ね高い評価であった。「Ⅴ(学部独自の設問)」については、教育環境に関連する設問である「Ⅴ2(授業教室の環境や設備)」及び「Ⅴ3(現代心理学部の教育研究設備)」については、比較的高い評価だった。学科別での評価の差はわずかであり、全体の傾向は学部全体の傾向とほぼ同じであり、学科独自の特筆すべき課題があるとは言えない。

全体に、設備や教員の授業運営に対する評価は高いが、学生の授業外での積極的、自発的な学習を促進する工夫が今後の課題である。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

授業評価に対する担当教員の所見は、まず、授業評価に対しては、おおむね期待した結果が得られたとする所見と、授業スタイルは変わらないので毎年アンケートをする意味がない、とする所見と、学生の反応を見ながら試行錯誤で授業を作っているのでアンケート結果から学生の混乱が見られるという所見があった。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

記述による評価に対する所見からは、高い評価を得て満足であるという所見と、否定的な評価を得て失望したり、勝手なことを書いているのではないかと疑問を呈したりする所見に分かれた。無記名で書くアンケートは、匿名性により守られた弱者が主張できるメリットと、匿名性を利用した破壊性を持つコメントが出てくるデメリットの両面がある。後者の場合に教員が一部の学生の否定的な評価に対して萎縮するというFDにとっては逆効果である現象が生じる場合も考えられる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

改善に向けた今後の方針については、授業評価に対して高い評価を受けたと感じている教員はさらに工夫を重ねようとしており、否定的な評価を受けたと感じている教員も、記述による評価にみられた点についての改善を具体的に考えており、真摯な取り組みの姿勢が見られた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

学生にとって「受けやすい」授業、すなわち、シラバスに沿っている、多様な刺激により飽きさせない工夫（例えばゲストスピーカー）をしている、聞きやすい、などの「快適な」授業が高い評価を受けている傾向が見られた。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

教員の意図が学生に正確に伝わらず、学生の期待に添わない、例えば、シラバスに書かれていない授業展開などは否定的な評価を受けている。また、学生にとって快適でない、すなわち、聞きにくい、読みにくい、わかりにくい、授業は否定的な評価を受けている。

5. 今後の改善に向けて

学生にとって魅力ある設備や環境を整え、教員が学生にとって快適で魅力ある授業運営を工夫するという意味では、全体に本学部では成功しているという結果だった。一方、そのような「お客様」としての学生ではなく、自ら調べたり考えたり、発見したり深めたり広げたりする、という「学ぶ主体としての学生」を育てる教育には、まだ課題を残してい

ることが明らかになった。サービスする教員としてのFDには成功したものの、学生自身の学ぶ力、考える力を育てる教員としてのFDは道半ばである。この授業評価アンケートが、そのような力を育てることにどのように寄与するかが、今、検討されるべき課題だろう。

4-1-1 全学共通カリキュラム

1. 科目選定方針とねらい

2012年度は、全カリの新カリキュラム施行に伴い、「総合 A」を中心として新たに設立された「立教 A」、2012年から開始となった「領域別 A」、「総合 A」から継承された「主題別 A」の3カテゴリを対象として、原則1教員1科目の合計275の科目で実施した。

2. 集計データにみられる結果のまとめ

履修者総数41,649名から25,867の回答を得ており、回答率62.11%になる。これはすべての対象学部との総平均62.30%と比べるとわずかに低いが、2011年度に比べるとかなり改善された数値だといえる。

1) 設置科目別平均値の全体的傾向

教員の授業の進め方に関しては、比較的高い評価を得ている。授業の進め方(Ⅱ)に関しては、板書の仕方(Ⅱ7)を除いて3.9を超え、授業の準備(Ⅱ9)に関しては4.32と高い評価を得ている。教員側が準備を周到に行っていた様子を伺うことができる。またこれに関して、授業内容に対する総合的評価(Ⅳ)も、わかりやすさ(Ⅳ1)が3.99、目標の明確化(Ⅳ2)が4.00、授業の満足度(Ⅳ4)は3.95と、いずれも高い値となっている。

これに対して学生側の取り組みについていくつかの問題がみられる。I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」は3.02、さらにI3「この授業の履修にあたって十分な準備ができていた」は3.12、I6「授業時以外に学習した時間」に関しては2.01の1時間未満と極端に低くなっている。学生は積極的に授業に参加しており、出席率もそれほど悪くはないが、そこから何か新しい知識を発展をさせたり、授業時間外で興味を広げたりしているわけではないようである。

またⅢ「この授業から得ることができたもの」については、Ⅲ1「自分にとって新しい考え方・発想」は3.93、Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」は3.81、Ⅲ4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」は3.74と、いずれも3点台の後半であるのに対して、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」については3.31と、3点台前半となり、学生が受動的な態度で授業を受けていることがわかる。知識を受け入れるのみならず、自ら調べて、考え、発展させていく重要性を学生に伝えていく必要があるだろう。

また学部等による設問で、授業環境に関しては、教室の大きさ(V1)、受講者数の適切さ(V2)、教室環境など(V3)については、いずれも4.00点以上になっている。教師側も熱心に準備をして、教室環境も良い中、学生が能動的に学ぶ意欲を如何に持たせるか、という点は課題として残っていると思われる。

2) 授業規模別平均値の特徴

授業規模別の平均値をみると、規模の差がでるのが「十分な静粛性が保たれた」(Ⅱ5)の項目で、100名までが4点台であるのに対して、101~150名は3.80、151名以上は3.75になっている。しかし、昨年度の結果で、151名以上が3.51であったことを考えると状況は改善しているともいえる。2012年度から、全科目抽選登録を取り入れ、大規模クラスが大きく減少したことが効果をもたらしたかもしれない。

受講者数の多い方が高い出席率（I1）であることを考えると、学生の関心が高い授業は受講者が多くなり、総合評価（IV）についても、「わかりやすさ」「目標の明確さ」「学問的興味」「満足度」など、いずれの項目も151名以上の大規模教室が最も高いポイントになっている。またⅢ「この授業から得ることができたもの」に関しても、「新しい考え方・発想」「基本的な専門的知識」「現代に通じる普遍的な意味」などにおいて最も高くなっていた。しかし、反対にⅢ3「自分で調べ、考える姿勢」については50名以下の少人数教室が3.38と最も高い結果となっている。また、授業規模の小さい方が、レジュメプリントや参考文献などが効果的であったという結果もでていいる。

つまり、わかりやすい講義に学生が集まり、効果を上げる大規模教室に対して、小規模教室では学生が能動的な学習態度を身につける機会を多く提供していると考えられる。

3) 学年別平均値の特徴

学年別の平均値をみると、全カリの履修者は、1年生が10,812名と最も多く、全カリ全体の回答の約42%を占めるなど、回答結果にも大きな影響を与えているといえる。

学年別の傾向をみると、I1「授業全体を通じての出席率」、やI2「この授業に積極的に参加した」については1年生が最も高く、学年が進むにつれて低下する傾向にある。しかし、I4「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」、I6「授業時以外に学習した時間」などは高学年ほど高い数値を示している。つまり、学年があがるにつれて、能動的な受講態度になっていると思われる。

また、II「授業の進め方」およびⅢ「授業から得ることができたもの」、IV「総合的評価」については、いずれも高学年になるにつれて高くなる傾向があり、これは2011年度の結果と同様である。とりわけ授業から得ることができたと感じている4年生と1年生ではいずれも大きな差が目立つ。1年生は、やる気や参加への意欲はあったとしても、大学の講義という新しい勉強の内容を消化しきれていないのではないかと考えることができる。

4) 相関関係表について

項目同士の相関を示す相関係数表をみると、I「授業への取り組み方」のうち、積極的参加（I2）については、Ⅲ「授業から得たもの」IV「総合評価」の多くの項目、とりわけIV4「授業の満足度」と比較的強い相関関係を示している。またI4「発展的な勉強をした」では、Ⅲ「授業から得たもの」のいずれの項目とも比較的強い相関関係を示しており、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」が高まったと感じている。授業を受けることのみならず、その後の発展的な勉強が、自らの思考能力の向上につながっていると感じている学生が多いということであろう。

またII「授業の進め方」の項目についてII3「各回の授業ねらいが明確」である講義は、II4「授業内容が明確だった」、さらにはIV2「授業全体の目標が明確」であるとなり、Ⅲ「授業から得たもの」のⅢ3「自分で調べ、考える力」を除く3項目と比較的強い相関を持っている。II4「授業内容が明確だった」という講義は、IV1「わかりやすさ」、IV2「授業全体の目標が明確」と強い相関関係をもっていることから、教員側が明確なねらいを持って、わかりやすい授業を実施することが、学生の取り組みに劣らず重要になっているのである。

その一方で、II5の「静肅性が保たれている」については、Ⅲ「授業から得たもの」やIV

「総合評価」とそれほど相関を示しておらず、学生が授業に集中できるような教育環境がある程度整備されていることを示しているのではなかろうか。むしろ教員側の周到的な授業準備や明確な内容が、学生の学習意欲を高め、良い効果をもたらすことにつながる事が理解できよう。

3. 今後の改善に向けて

全カリでは2012年のカリキュラム編成を経て、新たに「総合A」からの独立カテゴリである「立教A」、科目提供学部の学生は履修できない「領域別A」が設立された。各カテゴリの総評からも、新たなカリキュラムが導入されることにより、新たに検討すべき課題がいくつか指摘された。また2012年度からすべての科目を抽選登録としたことで、大規模クラスが減り、授業環境の改善がわずかながらみられた。また授業時以外に学習した時間が少し増加したことは、カリキュラム編成が何らかの影響を与えているのかもしれない。

今後の改善点としては、学生が履修にあたって準備をし、またその後、自らの興味関心を促すような機会を如何に提供していくか、という点が重要になるだろう。教員側が内容をわかりやすく伝え、それに対して学生側が新しい考えを身につけて自分でさらに知識を広げるといふ、相互的な学習体制をいかにサポートしていくかが、まさに問われているといえる。

4. 各カテゴリの総評

4-1. 立教科目群

1) 立教A

アンケートの対象となっている「立教A」は、旧カリでは「総合A」（現在の「主題別A」）の5つのカテゴリの中に分散して配置されていたのが、新カリへの移行に伴い新たにカテゴリとして切り出されたものである。独立したカテゴリとして集計されたことで、この分野が抱える問題点が浮かび上がった。旧カリでは卒業要件単位の設定に際し自然科学系科目とその他との間に仕切りが設けられていたので、「楽勝」を噂される特定の自然科学系科目への受講者の集中という問題が生じていた。新カリでは仕切りが立教科目群・領域別科目群とその他との間に移行したので、この集中傾向はそっくり立教科目群に移転した形になっている。以前から一部の立教科目群は学生に対する受講の動機付けの点で問題を抱えていた。新カリへの移行によって、必ずしも受講意欲の高くない学生が立教科目群に多数登録する傾向が強まった結果、問題は一層明確にあぶり出された格好である。アンケートでほぼ全ての質問項目について、他のカテゴリよりも平均点が低いことが、その一つの表れである。回答率の数値はカテゴリ別に集計されていないが、個別科目の数字をみると、とくに大人数科目で、きわめて低いものが見られる。しかしこうした、ほとんどが制度の側に起因する不利な条件に対して、受講者の学習意欲を多少なりとも高めるべく各教員が必死の努力を行っていることが所見欄から読みとれる。科目を編成する側としては、各教員のそうした努力を一層サポートするとともに、こうしたアンケートの結果を2016年のカリキュラム改訂に向けての議論に生かしていきたい。

4-2. 領域別科目群

1) 領域別 A

このカテゴリは、2012 年度カリキュラムから始まったカテゴリで、科目提供学部 of 学生は履修することが出来ない点が大きな特徴である。コマ数は 60 で他カテゴリに比べてアンケート回答者数が最も多くなっている。集計データを見るといずれの項目もほぼ平均値となっており、際立った傾向はあまりみられない。さらに各質問の相関関係表をみると、各回の授業のねらいが明確であったために授業内容もわかりやすく、また学問的興味をかきたてられて、授業に満足したと答えている学生が多かった。

これに対し、担当教員の所見票の中には、大人数教室の場合、私語の問題を指摘しているものが多くみられた。また学生が自らの関心をのばすために、内容的に関連する講義間の連携をとれるようにする方が良いという意見や、講義だけでなく、対話形式やディスカッション形式を増やしていきたいという積極的な意見もみられた。しかしその一方、他学部提供の授業をとるという本科目に対して、柔軟に視野を広げるよりも専門に特化することが求められるような学問には、「領域別 A」のような科目は全くそぐわないとして制度の廃止を求める意見もあった。また多くの教員が、専門以外の学生が多い講義の基準をどこに置くのか（基礎的な部分にとどめるのか、専門にも踏み込むのか）について苦勞しており、パワーポイントやレジュメを準備して、できるだけわかりやすく基礎的な説明を意識しているなどの工夫がみられた。

いずれにしても、2012 年度から開始された「領域別 A」については多角的な視点から検証していくことが求められているといえる。

4-3. 主題別科目群

1) 主題別 A

①「人間の探究」

「人間の探究」カテゴリの各項目は、概ね全カリ平均を上回る評点を獲得している。これは各教員の真摯な努力と取り組みの結果といえるだろう。全カリ平均を下回る項目として、授業で扱った分野に関する基本的な専門知識（Ⅲ2）が得られたかという設問が挙げられる。このカテゴリの中には、教員が基本的な専門知識に関する資料を毎回配布したことが高評価につながったケースが確認されており、教員側の小さな工夫が評価の改善につながるものと期待される。

授業中の静肅性（Ⅱ5）については、昨年の 3.84 から今年の 3.95 へと改善の方向にあり、全カリ全体でクラス規模を縮小し、私語対策を行ったことが、一定の評価を得つつあると考えられる。他方、2011 年度「キャンパス・ハラスメント実態調査アンケート」結果には私語に対する根強い苦情が寄せられており、全カリ科目においても、今後も引き続き動向を見守る必要があるだろう。このカテゴリの場合、特に 250 名以上のクラスの多くで静肅性の保持が難しくなる傾向にある。また、担当教員によっては、記述式評価で教室後方部の私語の指摘を受けて初めて気付くケースがあった。兼任・専任を問わず、私語抑制に関する予備知識や注意点を事前に伝達する FD 活動が実施されると有効ではないだろうか。

このカテゴリは、教室や受講生の規模の適切さについて、全カリ平均よりも低い評点を得ている。これは、大人数科目での教室混雑ばかりでなく、その逆のケース、すなわち大

きすぎる教室での少人数授業も含まれている。今回、評点の低かった科目の中には、1限や5限など教室配当に余裕のある時間帯に置かれたものもあった。受講生が極端に少ない授業についてはその要因を探る一方で、受講者数と教室規模がかけ離れている場合については、事務局から担当教員に対して、教室変更を働きかけることが効果的と思われる。

②「社会への視点」

このカテゴリを全カリの他のカテゴリと比較すると、ほぼ全体の平均と同じ傾向を示しているものの、いくつか数値の高い項目を見出すことができる。

とくにⅢ「この授業から得ることができたもの」の諸項目の中で、Ⅲ4「授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味」は全カテゴリの中で最も高く、Ⅲ2「授業で扱った分野に関する基本的な専門知識」、Ⅲ3「自分で調べ、考える姿勢」は全カテゴリの中で2番目に高い評価を受けている。これらは、いずれも2011年度の数値と比べても向上しており、学生が授業から手ごたえを感じ、新たな発想や自ら調べる姿勢につながられるようになってきているものと理解できる。

これと関連して、Ⅰ「この授業へのあなたの取り組み方について」の中でも、Ⅰ4「授業をきっかけに発展的な勉強をした」、Ⅰ6「この授業に関連して、授業時以外に学習した時間」も、前年度に比べてやはり数値が上がっていることも指摘しておきたい。ただ、この6の授業時以外の学習時間については、1時間程度（選択肢2が1時間未満、選択肢3が1-2時間で2.06）となっている。本来はもっと予習・復習に時間が求められるところである。

所見票については、例年みられる教室環境についての苦情はほとんど見られなかった。逆に、講義における話し方、プレゼンのしかたなどを工夫し、それが学生からも好評を得ているとの記述が、とりわけ2011年度に引き続いて授業を担当した教員から多かった。パワーポイント、Facebook、Twitterなどを利用する、今後利用したい、という記述も見られた。こうした傾向が今後も続くことを期待したい。

③「芸術・文化への招待」

このカテゴリの授業を受けて満足した(Ⅳ4)は、2011年の3.68から2012年度の3.97へと、改善へ向かっている。映像視覚教材の使用の効果(Ⅱ8)が全カリの全カテゴリの中で最高点(4.39)であることは、このカテゴリの特徴を表しており、教員による努力が高く評価された結果ともいえるだろう。

その一方で、聞きやすい話し方だった(Ⅱ1)、授業のねらいや内容の明確さ(Ⅱ3、Ⅱ4)は、全カリ平均をやや下回っており、新しい考え方・発想(Ⅲ1)や基本的な専門知識(Ⅲ2)を得たと感じる受講者数も全カリ平均以下である。さらに「授業で扱った内容がもつ、現代に通じる普遍的な意味」(Ⅲ4)については、2011年度より改善傾向にあるものの、全カテゴリの中で最低点(3.62)をマークしている。

前述の映像視覚教材の使用の効果(Ⅱ8)が高く評価される一方で、教科書・授業レジュメプリントの効果(Ⅱ6)についての評価が比較的低めである点は見逃せない。授業内で利用した映像資料の効果が教室内のみに限定されてはいないだろうか。受講生は、映像資料の内容全てを記憶することは出来ない。映像資料のポイントをレジュメに示す、教科書を用いて授業内容の振り返りをする、または受講生に十分な板書の時間を与える等、授業理

解を促すためには、教員が提供する映像資料と教科書・授業レジュメプリントが効果的につながっている必要がある。加えて、基本的な専門知識の定着を点検する小テストを実施するなどすると、映像資料から与えられた情報を知識として身につけた実感を学生にもたせることができるのではないだろうか。その一方で、授業の内容をやや発展させて、芸術・文化を学ぶことの意義や、その作品を知ることが現代に生きる自分にどう結びつくのかについて、教員がいくつかの考え方を紹介した上で、学生に考えさせることも、このカテゴリを学ぶ目的を明瞭化するのに有効と思われる。

④「心身への着目」

「心身への着目」は、心理学、スポーツ科学、ウエルネス科学、医学の各分野から構成されている。アンケート回答者数と科目数から算出した平均クラスサイズは、アンケートを実施している 7 つのカテゴリの中で最も多く、大人数科目が比較的多い傾向にあるのが特徴である。例年、このクラスサイズの大きさから静肅性の評価が他カテゴリと比較して低かったが、今回 7 カテゴリ中 2 番目に高い評価であり改善されてきていると判断できる。他のカテゴリと比較すると、Ⅱ「授業の進め方」に関する項目では 9 項目中 7 項目、Ⅲ「授業から得たもの」では 4 項目中 3 項目、Ⅳ「総合的評価」では 4 項目すべてで最高値を示し、静肅性に対する取り組みと合わせて、担当する教員の講義形式、内容が高く評価されていることがわかる。一方で、Ⅰ「授業への取り組み」に関する項目では、自学自習時間が最も少なく（平均 1 時間未満）、発展的な学習ができていない傾向が見られた。さらに、Ⅲ「授業から得たもの」に関する項目でも、新しい考え方・発想や専門知識を得ることができたが、自分で調べ、考える姿勢を得ることは十分にできていないことも示唆された。

これらの結果から、大人数科目が多い中、各教員が工夫して授業を展開し、静肅性も改善されていることが示唆された。今後は、CHORUS などの自学自習支援システムを利用しながら、自分で調べ、考える姿勢を習得できるような、さらなる工夫が必要であると考えられる。

⑤「自然の理解」

カテゴリ別のアンケート結果を見ると、ほぼ全カリの回答の平均値と同じ程度の値となっている。ただ 2011 年度の結果と比べるとほとんどの項目でわずかながら値が上がっている。特にⅡ1「聞きやすい話し方だった」、Ⅱ2「各回の授業内容の量が適切だった」、Ⅱ3「各回の授業のねらいは明確だった」、Ⅱ4「各回の授業容は明確だった」、Ⅳ1「わかりやすい授業だった」、Ⅳ2「授業全体の目標が明確だった」の項目は 4 を超える評価へと上がっている。これは担当者の所見票からも読み取れるように、ほとんどが文系の受講生に理系の内容を講義するというので、担当者がそれを意識しかなり工夫をして授業を行っていることの表れと理解したい。それでもなお、内容が難しいという声は散見されるようで、理系の内容を伝えることの難しさが見受けられる。このカテゴリは比較的少人数のクラスが多いというは 1 科目あたりの回答者の数からも読み取れる。それなのに「静肅性」に関する評価が相対的に低いのは改善の余地があろう。学生の授業外での学習時間の少なさや、授業が学生の主体的な学習に結びついていないという点は、全学共通カリキュラムだけの問題ではなく各学部でも問題になっている点である。授業担当者の多くも、この点を改善

点としてあげている。しかしながら、全カリという枠組みの中で理系の科目を展開することを考えると、担当者個人の工夫だけでは限界があるのではないだろうか。

4-12 学校・社会教育講座

1. 科目選定方針とねらい

教職課程は「講義科目 1 教員 1 科目」を原則として実施し、他課程は、課程主任の判断で、2012 年度、特に授業評価を要する重点的科目に限って実施した。各教員の授業の改善や工夫について検討するために有用なデータを得たいと考えたためである。

2. 集計データにみられる結果

全体に共通する特徴として、授業への出席率の高さを挙げることができる（すべての授業を通じての出席率の平均値は 4.72）。調査対象科目の履修者数が 3,775 人とさほど多くない中、回答者数は 3,040 人（80.53%）と高い数値を示しているが、この結果はそうした出席率の高さを反映していると思われる。

まず、設問項目別平均値についていえば、授業への評価（Ⅱ～Ⅳの設問への回答）は、おおむね 4 以上の高い評価を得ている。板書や普遍的な意味、学問的興味などは 3 点台後半の評価だが、それでも標準偏差はどれも 1 前後であり、高い値を示している。もちろん、改善の余地がないわけではない。たとえば毎年、どこの学部学科でも問題になる板書のあり方についていえば、学生がどんな不満を抱いているかを具体的に把握したうえで、必要に応じて適切に対処する必要があるだろう。

一方で、学生自身の取り組み方についてたずねた設問Ⅰの計 6 問については、4.00 を超えたのは、上述の出席率を除けば、「この授業に積極的に参加した」という項目だけであった。授業から何を学んだかを聞いた設問Ⅲの計 4 問や、総合的評価を聞いた設問Ⅳの計 4 問には、ほぼ 4.00 に近い評価が寄せられた。ただ、設問Ⅲの「自分で調べ、考える姿勢」は平均 3.59（標準偏差 1.01）にとどまった。また、設問Ⅰの「授業をきっかけにして発展的な勉強をした」への回答も平均値 3.25（標準偏差 1.07）である。自主的、主体的に学ぶという意欲と習慣を身に着けるといって、学生はいっそうの努力が求められている。

授業規模別平均値では、とくにⅣの設問への回答を見ると、51～100 名規模のクラスでの科目の評価が概してやや落ち込んでいる。例年この点については、101 人以上の大規模教室での科目の方が、数値が低い傾向にあるので、中規模のクラスの科目でこうした結果が出た理由については、次年度以降の調査結果もまちながら、慎重に見極めていく必要があるだろう。

学年別平均値では、学年が上がるにつれて、評価がわずかではあるが高い傾向が見られる。この理由として、年を追って学生が大学の授業に慣れてくるといって、また年齢的に成熟してくるといって点などが考えられる。

設問への回答の相関関係の分析では、ほぼ例年と同じ結果が出ている。すなわち、授業のわかりやすさ（設問Ⅳ-1）と授業目標の明確さ（設問Ⅳ-2）が、聞きやすい話し方（設問Ⅱ-1）、授業のねらいの明確さ（設問Ⅱ-3）、授業内容の明確さ（設問Ⅱ-4）と相互に強い関係を有しているということである。あらためていうまでもないが、授業に際して教員に求められるのは、授業の狙いを明確にし、そのために必要な構成を組み立て、無駄のない言葉で明快にかたる、ということに尽きる。

3. 担当教員の所見票に対するまとめ

3-1 「授業評価に対する担当教員の所見」のまとめ

兼任講師を含めて、多くの教員が、「熱心」「前向き」といった学生の基本的な取り組みの姿勢に対して好感を抱いていることがわかる。もちろん、一方で、授業時以外での学習時間をもっと確保して、より主体的、自主的に授業に関わってほしいという希望も寄せられている。

3-2 「記述による評価に対する担当教員の所見」のまとめ

各課程、また各科目の性質によって実際の授業の進め方がかなり違うので、一概に述べるのは難しいが、例えば新聞・雑誌の記事、配付資料、映像、グループワーク、ミニ・レポート、学生による発表、板書、課題などなど、さまざまな方法を工夫して学生との意思疎通の質を高めようと努めていることがうかがわれる。

3-3 「改善に向けた今後の方針」のまとめ

上記と同じく、各科目の性質、そして出席者数が違うため、一般的な議論にはなじまないが、効果的な板書をこころがけ、パワーポイントなどの視聴覚機器をより活用していきたいという声が多くなかった。ただ、パワーポイントについては功罪両面があるようで、その使い方、とくに内容や量について、まだ改善の余地があるとする声もあった。さらに、ミニ・レポートや討論、グループワークなど、一方的な授業ではない、もっと学生が参加できる、双方向の授業のありかたを手探りしながら実現していきたいという声も聞かれた。

4. 学生からの意見（記述による評価）の集約

4-1 「肯定的評価として多い意見の集約」

全体に教員の熱心な姿勢に対する高評価が目立った。具体的には、視覚資料を含む事前の入念な資料準備や、日常の出来事や現象をめぐるユニークな視点、見方の提示、また経験を踏まえた具体的な事例に基づく授業の進め方、などである。

4-2 「否定的評価として多い意見の集約」

記述による否定的評価は、全体の量からいえばさほど多くはない。例年のことだが、板書の見にくさへの指摘が何件もあった。同じくこれも例年見られるが、パワーポイントの使い方については功罪双方について意見があった。ただし、この件は、教員の側からも似たような意見が寄せられている。一方、履修者数と教室の規模が合わないために（部屋が広すぎるために）、授業の雰囲気に影響している、冬場は寒かった、などという指摘もいくつかあった。

否定的な評価については、学生にとっては書きづらいという側面があるものと推測される。したがって、量的に少ないことに安住するのではなく、その背後にある声なき声に耳を傾ける姿勢を、教員は持つべきだろう。

5. 今後の改善に向けて

就職難とされる昨今の社会状況もあり、教職課程を中心に講座各課程の履修希望者は

年々少しずつ増加しており、受講生の意識も高い。そんな事情を反映して、寄せられるアンケート結果も前向き、とくに記述式においては真摯な回答が多い。結果を総覧すれば、おおむねどの課程でも学生の評価は高く、それ自身としては満足するべきものである。しかし、学生個々の学問的な興味を刺激し、さらに発展的な取り組みへと自主的に進むことを後押しするというところまでは至っていない、というのが正直な感想であり、この点では反省と改善の余地がある。

大学の文系科目では、ややもすれば大規模授業に流れがちで、学生個々も孤独な生活にこもりがちになる。だが、幸い本講座では大人数の授業はそれほど多くはない。したがって、この利点を活かして、できるだけ学生一人ひとりに寄り添いながら、きめの細かな対応をしていくべきであろう。それによって、学生と教員の間でより豊かな意思のやりとりが生まれ、学生の満足度の向上へとつながっていくのではないかとと思われる。

また、学生からの意見、要望に対して、教員の側からも所見が述べられているが、いずれも誠意ある内容である。これらを活かし、教員は、学生の要望を踏まえた授業内容の改善への具体的な道筋を、つねに意識的に思い描くことが求められている。

5. 2012 年度のまとめと今後の展望

2012 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会
委員長 東條 吉純

2012 年度は、2009 年度の教育改革推進会議において決定された「基本方針」（中期的な実施計画）にしたがい、「学部等の必要性に応じた選定」に基づく科目群について実施された。まず、本学における教育インフラの重要な一部を構成する授業評価アンケートが、2012 年度も安定的に実施されたことを報告する。

2012 年度のアンケート実施における最大の変更点は、授業評価アンケートの実施時期を最終授業週にも設定できるようにしたことである。従来、授業評価アンケートは、①授業が進行した後半の時期に、②試験の時期を避けるという考え方により、前期は 6 月下旬～7 月中旬、後期は 12 月に実施されてきた。このため、本来、授業期間の終了間際にアンケート実施した方が、対象科目をより適切かつ効果的に評価可能であるとの意見は寄せられていたが、最終授業時筆記試験との同時実施による混乱を避けるため、3 週前に実施（2 週前は予備週）されてきた。今回の変更は、全学教務委員会における学部からの意見を受けて、授業評価アンケート実施委員会および教育調査の検討グループにおいて改めて検討を行い、教務事務センターとの調整等を経て、2012 年度より最終週の前週（13 回目）にアンケート実施することを原則とし、担当教員の要望に応じて、予備週として設定される最終週（14 回目）に実施することも可能となった。実施時期の変更にあたり、運用上懸念されたのは、最終授業時筆記試験（成績評価 40%を超える試験）の実施科目について、何らかの事情により、最終週の前週に実施できなかった場合の運営上の混乱のおそれであったが、各学部等やアンケート実施委員会による注意喚起も奏功し、実際には大きな支障なく無事に実施された。また、実施率においても、前年度（2011 年度）の 97.3%を上回り、2012 年度は 97.6%となった。

各学部の総評を見ると、2012 年度は、いくつかの学部において、授業時以外の学習時間の確保が、今後の改善に向けた課題として特記されている。教室外の学修時間の確保は、学生の主体的な学びを測定する客観的指標として中央教育審議会がもっとも着目している評価項目の一つであるところ、本学の授業評価アンケートは、この項目について、有効な改善の手立てを見出せぬまま、極めて低調かつシビアな集計結果を毎年度学内に発信し続けている。従来、学生による学びの姿勢の問題は、ともすると教員側の問題というよりも学生側の問題とみなされ等閑視されがちであったが、この問題を明確にカリキュラムや教育方法のあり方に密接に関連する問題であると捉え、その改善に向けて、学部等が組織的な取り組みを推進するという方向性はきわめて重要である。

授業評価アンケート集計結果の活用については、各学部等によって統計学的な評価・分析能力に違いがあることは否めないところ、授業評価アンケート実施委員会としては、大学教育開発・支援センターや社会情報教育研究センター（CSI）とも連携を図りつつ、学部等の教育力向上ないし組織 FD の取り組みのために、各学部固有のニーズに応じて、より積極的なサポートを行っていきたいと考えている。

授業評価アンケート制度は、大学基準協会による認証評価項目の一つにも挙げられてお

り、大学におけるFDの取り組みの成果を測定するための数少ないツールの一つである。学生によるアンケート調査である以上、その有効性には様々な問題点もあるのは無論のことであるが、これに代わる適切かつ有効な測定方法が開発・実施されない限り、授業評価アンケート制度は、今後も、本学の教育インフラの一部であり続ける。

本学における授業評価アンケート制度は、一方で教員組織サイドには、個々の教員における授業力の向上、学部・学科としてカリキュラムの有効性を測定、大学としての教育力向上等を目的とし、他方で学生サイドには授業履修への積極性と責任意識を喚起するというそれ自体教育的な狙いをもってスタートした。2004年度の開始以来、10年目を迎えた今、このような本制度の本旨に立ち戻り、大学教育を創る主体である教員と学生の協同作業という観点から、両主体による本制度へのさらなるコミットメントに期待したい。

6. 集計データ（資料編）

6-1 回答者数・回答率

延べ回答者数 80,249名

表1 学部等別履修者数と回答者数、および回答率

科目開設学部等	履修者数	回答者数	回答率
文	10,600	7,234	68.25
経済	3,868	2,774	71.72
理	7,232	4,572	63.22
社会	19,121	10,668	55.79
法	3,310	1,547	46.74
経営	15,797	9,814	62.13
異文化コミュニケーション	420	373	88.81
観光	10,420	6,650	63.82
コミュニティ福祉	9,733	6,067	62.33
現代心理	2,889	1,643	56.87
全学共通カリキュラム	41,649	25,867	62.11
学校・社会教育講座	3,775	3,040	80.53
合計	128,814	80,249	62.30

注1) 履修者数・回答者数は、アンケート実施科目の延べ履修者、回答者

注2) 学部等は、アンケート実施科目の開設学部により分類した

表2 学部等別学年別の回答者数

科目開設学部等	1年	2年	3年	4年	不明	合計
文	3,273	2,169	1,118	520	154	7,234
経済	2,287	273	93	63	58	2,774
理	1,485	1,457	1,352	193	85	4,572
社会	2,924	3,695	2,795	1,106	148	10,668
法	270	317	621	323	16	1,547
経営	3,432	3,155	1,998	854	375	9,814
異文化コミュニケーション	361	6	0	0	6	373
観光	1,306	2,484	2,110	619	131	6,650
コミュニティ福祉	844	2,036	2,181	900	106	6,067
現代心理	393	755	334	124	37	1,643
全学共通カリキュラム	10,812	7,352	4,484	2,617	602	25,867
学校・社会教育講座	1,022	1,080	705	111	122	3,040
合計	28,409	24,779	17,791	7,430	1,840	80,249

注1) 回答者数は延べ人数

注2) 学年は当該学部等で実施したアンケートに回答した学生の学年を示す

注3) 学部等により実施科目の選定方針が異なるため、学年の偏りがある

6-2 学部等別平均値

表3 文学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	7,220	4.63	0.62
I 2 この授業に積極的に参加した	7,218	3.97	0.94
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	7,216	3.34	1.03
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	7,198	3.28	1.09
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	7,158	3.54	1.07
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	7,193	2.37	1.09
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	7,216	4.04	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	7,211	4.02	0.95
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	7,210	4.00	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	7,205	4.06	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	7,196	3.80	1.19
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	7,135	3.91	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	4,309	3.56	1.09
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	5,160	4.12	1.02
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	7,034	4.26	0.85
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	7,209	3.91	0.97
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	7,210	3.91	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	7,210	3.54	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	7,202	3.70	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	7,211	3.98	1.03
IV 2 授業全体の目標が明確だった	7,208	3.99	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	7,212	3.88	1.03
IV 4 この授業を受けて満足した	7,210	3.96	1.02
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,981	4.19	1.01
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,982	4.04	1.07

注1) 回答者数は延べ人数(II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表4 経済学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	2,767	4.67	0.67
I 2 この授業に積極的に参加した	2,767	4.13	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	2,763	3.44	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	2,766	3.35	1.09
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	2,745	3.14	1.09
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	2,763	2.64	1.14
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	2,767	3.94	1.11
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	2,764	3.81	1.09
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	2,762	3.92	1.02
II 4 各回の授業内容は明確だった	2,759	3.96	1.01
II 5 十分な静粛性が保たれた	2,765	3.88	1.08
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	2,739	3.84	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	1,841	3.50	1.16
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	1,621	3.86	1.14
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,682	4.14	0.94
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	2,764	3.63	1.02
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	2,762	3.89	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	2,762	3.60	1.03
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	2,757	3.57	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	2,762	3.86	1.11
IV 2 授業全体の目標が明確だった	2,760	3.92	1.03
IV 3 学問的興味をかきたてられた	2,759	3.61	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	2,760	3.78	1.07
V 学部等による設問			
V 1 (全科目共通設問) 教室の規模と設備は適切であった	2,398	4.14	0.97
V 2 (基礎ゼミナール1) 経済文献を読む力がついた	613	3.89	0.89
V 3 (基礎ゼミナール1) レジュメやレポート作成の力がついた	613	4.20	0.80
V 4 (情報処理系科目) 表計算ソフト(Excel)の応用力が身についた	813	4.15	0.82
V 5 (情報処理系科目) Power Point でプレゼンテーション資料を作成する力が身についた	812	3.95	0.98
V 6 (情報処理系科目) WEB 上から経済資料・統計資料を入手する力が身についた	812	4.03	0.92

注1) 回答者数は延べ人数(II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表5 理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	4,556	4.65	0.69
I 2 この授業に積極的に参加した	4,558	3.96	0.99
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	4,552	3.26	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	4,549	3.20	1.09
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	4,534	3.25	1.08
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	4,547	2.57	1.10
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	4,553	3.80	1.12
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	4,553	3.76	1.04
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	4,549	3.81	1.01
II 4 各回の授業内容は明確だった	4,547	3.83	1.02
II 5 十分な静粛性が保たれた	4,540	3.93	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	4,509	3.69	1.10
II 7 板書のしかたが適切だった	3,843	3.58	1.17
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	2,879	3.75	1.08
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	4,451	4.09	0.93
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	4,549	3.68	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	4,548	3.79	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	4,544	3.50	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	4,538	3.40	1.03
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	4,544	3.69	1.12
IV 2 授業全体の目標が明確だった	4,543	3.77	1.01
IV 3 学問的興味をかきたてられた	4,541	3.62	1.07
IV 4 この授業を受けて満足した	4,540	3.66	1.06
V 学部等による設問			
V 1 教員は質問・疑問に対し積極的に答えてくれた	4,274	3.92	0.95
V 2 (1年次前期必修科目のみ)教員は高校までの授業スタイルとの違い を考慮して授業展開をしてくれた	864	3.60	1.04
V 3 (必修科目のみ)授業で困った際に、練習問題を解き合う等で学生同 士が共同して解決策をとった	2,409	3.70	1.12

注1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表6 社会学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	10,645	4.53	0.71
I 2 この授業に積極的に参加した	10,644	3.77	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	10,637	3.09	1.00
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	10,619	3.06	1.07
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	10,562	3.44	1.02
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	10,625	2.16	1.02
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	10,635	3.86	1.07
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	10,633	3.88	0.96
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	10,630	3.85	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	10,608	3.88	0.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	10,612	3.70	1.15
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	10,524	3.71	1.06
II 7 板書のしかたが適切だった	6,367	3.41	1.09
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	8,856	4.01	1.00
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	10,408	4.13	0.88
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	10,616	3.77	0.98
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	10,615	3.73	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	10,612	3.32	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	10,597	3.71	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	10,609	3.80	1.07
IV 2 授業全体の目標が明確だった	10,610	3.82	0.99
IV 3 学問的興味をかきたてられた	10,610	3.68	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	10,610	3.76	1.07

注1) 回答者数は延べ人数(II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表7 法学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	1,545	4.37	0.94
I 2 この授業に積極的に参加した	1,543	3.74	1.07
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,544	2.98	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,539	3.01	1.09
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	1,531	3.44	1.08
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	1,536	2.34	1.01
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,546	3.79	1.18
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,545	3.81	1.07
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,545	3.89	1.04
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,542	3.97	1.00
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,541	4.30	0.90
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,530	3.75	1.08
II 7 板書のしかたが適切だった	1,178	3.23	1.15
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	616	3.55	1.13
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,493	4.15	0.92
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,542	3.85	1.00
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,543	3.93	0.93
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,542	3.33	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,541	3.85	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,543	3.84	1.11
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,544	3.92	1.02
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,544	3.77	1.11
IV 4 この授業を受けて満足した	1,544	3.87	1.06

注1) 回答者数は延べ人数(II7, II8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表8 経営学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	9,804	4.67	0.63
I 2 この授業に積極的に参加した	9,804	4.02	0.98
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	9,791	3.53	1.04
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	9,792	3.46	1.10
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	9,753	3.43	1.10
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	9,782	2.66	1.26
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	9,796	4.05	1.04
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	9,790	3.98	1.01
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	9,790	4.04	0.99
II 4 各回の授業内容は明確だった	9,782	4.05	0.98
II 5 十分な静粛性が保たれた	9,779	3.95	1.06
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	9,700	3.92	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	4,846	3.72	1.09
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	8,572	4.12	1.00
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	9,570	4.25	0.91
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	9,787	3.96	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	9,785	4.01	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	9,783	3.71	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	9,774	3.87	0.98
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	9,780	3.97	1.06
IV 2 授業全体の目標が明確だった	9,779	4.03	1.00
IV 3 学問的興味をかきたてられた	9,780	3.87	1.08
IV 4 この授業を受けて満足した	9,777	3.96	1.06

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表9 異文化コミュニケーション学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	372	4.83	0.46
I 2 この授業に積極的に参加した	370	3.84	1.05
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	371	2.95	1.10
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	371	2.95	1.09
I 5 シラバス（履修要項の講義内容）は受講に役立った	369	3.00	1.11
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間（平均して、1週間に） (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	370	2.11	0.92
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	370	4.11	0.95
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	372	3.98	0.99
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	372	3.99	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	370	4.07	0.90
II 5 十分な静粛性が保たれた	371	3.63	1.11
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	368	3.86	1.05
II 7 板書のしかたが適切だった	219	3.32	1.00
II 8 映像視覚教材（パワーポイント、ビデオなど）の使用が効果的だった	368	4.04	1.08
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	364	4.43	0.80
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	372	4.00	0.99
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	371	3.92	0.96
III 3 自分で調べ、考える姿勢	372	3.24	1.00
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	371	3.70	1.05
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	372	4.02	0.98
IV 2 授業全体の目標が明確だった	372	3.97	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	372	3.68	1.12
IV 4 この授業を受けて満足した	371	3.76	1.05

注1) 回答者数は延べ人数（II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている）

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表10 観光学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,637	4.50	0.70
I 2 この授業に積極的に参加した	6,636	3.92	0.93
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,628	3.21	0.99
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,626	3.18	1.06
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	6,593	3.60	0.98
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,623	2.14	1.01
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,637	3.95	1.05
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,633	4.01	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,630	3.98	0.97
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,622	4.01	0.96
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,622	4.00	1.03
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,557	3.90	1.04
II 7 板書のしかたが適切だった	3,752	3.51	1.12
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	5,876	4.11	0.93
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	6,486	4.28	0.83
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,634	3.92	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,629	3.89	0.91
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,629	3.47	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,621	3.74	0.96
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,629	3.92	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,627	3.94	0.97
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,624	3.80	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	6,624	3.89	1.04
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	6,525	4.20	0.93
V 2 この授業の受講者数は適切だった	6,518	4.15	0.90
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	6,509	4.22	0.85
V 4 わたしは、この授業を通じて、現代社会における観光の重要性を認識した	6,489	3.52	1.13
V 5 わたしは、この授業を通じて、観光関連の仕事に興味をおぼえた	6,492	3.31	1.18
V 6 わたしは、この授業を通じて、観光を学ぶことにより興味がわいた	6,488	3.51	1.17

注1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8では「該当しない」と回答したものは除いている)

注2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 1 コミュニティ福祉学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	6,054	4.44	0.72
I 2 この授業に積極的に参加した	6,056	3.87	0.92
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	6,056	3.17	1.01
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	6,042	3.10	1.06
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	6,009	3.54	0.98
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	6,046	2.13	1.04
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	6,058	4.00	1.00
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	6,057	4.02	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	6,054	4.03	0.93
II 4 各回の授業内容は明確だった	6,043	4.05	0.91
II 5 十分な静粛性が保たれた	6,046	4.00	1.05
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	6,006	3.93	1.00
II 7 板書のしかたが適切だった	4,250	3.54	1.05
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	5,297	4.14	0.93
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	5,937	4.24	0.83
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	6,052	3.92	0.93
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	6,050	3.86	0.90
III 3 自分で調べ、考える姿勢	6,050	3.39	1.02
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	6,045	3.81	0.95
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	6,049	3.95	1.00
IV 2 授業全体の目標が明確だった	6,048	3.99	0.93
IV 3 学問的興味をかきたてられた	6,051	3.79	1.04
IV 4 この授業を受けて満足した	6,049	3.93	0.99

注 1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている)

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 2 現代心理学部

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	1,642	4.56	0.69
I 2 この授業に積極的に参加した	1,642	3.85	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	1,639	3.05	1.02
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	1,636	3.04	1.11
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	1,625	3.54	1.04
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	1,639	1.97	0.98
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	1,641	3.84	1.03
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	1,641	3.98	0.92
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	1,641	3.93	0.98
II 4 各回の授業内容は明確だった	1,638	3.98	0.97
II 5 十分な静粛性が保たれた	1,637	4.11	1.00
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	1,632	3.87	1.02
II 7 板書のしかたが適切だった	1,213	3.52	1.10
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	1,378	4.23	0.87
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	1,613	4.26	0.85
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	1,641	4.03	0.94
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	1,641	3.91	0.92
III 3 自分で調べ、考える姿勢	1,641	3.31	1.08
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	1,638	3.76	0.99
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	1,641	3.90	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	1,641	3.92	0.98
IV 3 学問的興味をかきたてられた	1,641	3.95	1.02
IV 4 この授業を受けて満足した	1,640	3.94	1.00
V 学部等による設問			
V 1 この授業の受講者数は適切だった	1,607	4.21	0.87
V 2 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	1,606	4.28	0.85
V 3 現代心理学部の教育研究設備に満足している	1,605	4.05	0.96

注 1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている)

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 3 全学共通カリキュラム

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	25,816	4.55	0.69
I 2 この授業に積極的に参加した	25,816	3.88	0.97
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	25,792	3.12	1.05
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	25,781	3.02	1.12
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	25,660	3.55	1.05
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	25,770	2.01	1.02
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	25,788	4.06	1.01
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	25,796	4.06	0.93
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	25,777	4.03	0.96
II 4 各回の授業内容は明確だった	25,743	4.06	0.95
II 5 十分な静粛性が保たれた	25,727	3.90	1.09
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	25,520	3.92	1.03
II 7 板書のしかたが適切だった	15,120	3.54	1.08
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	22,578	4.20	0.94
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	25,242	4.32	0.82
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	25,767	3.93	0.96
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	25,762	3.81	0.94
III 3 自分で調べ、考える姿勢	25,762	3.31	1.06
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	25,703	3.74	1.00
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	25,762	3.99	1.02
IV 2 授業全体の目標が明確だった	25,754	4.00	0.96
IV 3 学問的興味をかきたてられた	25,757	3.84	1.06
IV 4 この授業を受けて満足した	25,751	3.95	1.03
V 学部等による設問			
V 1 この授業の教室の大きさは適切だった	23,889	4.05	1.08
V 2 この授業の受講者数は適切だった	23,841	4.03	1.01
V 3 この授業の行われた教室の環境や設備は十分だった	23,830	4.13	0.95

注 1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている)

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

表 1 4 学校・社会教育講座

設 問 項 目	回答者数	平均値	標準偏差
I この授業へのあなたの取り組み方について…			
I 1 授業全体を通じての出席率 (5:90%以上、4:70-89%、3:50-69%、2:30-49%、1:30%未満)	3,033	4.72	0.53
I 2 この授業に積極的に参加した	3,034	4.05	0.87
I 3 この授業の履修にあたって十分な準備ができていた	3,031	3.37	0.97
I 4 授業をきっかけにして発展的な勉強をした	3,025	3.25	1.07
I 5 シラバス(履修要項の講義内容)は受講に役立った	3,019	3.59	1.00
I 6 この授業に関連して、授業時以外に学習した時間(平均して、1週間に) (5:3時間以上、4:2-3時間、3:1-2時間、2:1時間未満、1:0時間)	3,027	2.17	0.95
II この授業の進め方は…			
II 1 聞きやすい話し方だった	3,034	4.23	0.99
II 2 各回の授業内容の量が適切だった	3,032	4.18	0.89
II 3 各回の授業のねらいは明確だった	3,030	4.15	0.95
II 4 各回の授業内容は明確だった	3,024	4.20	0.92
II 5 十分な静粛性が保たれた	3,029	4.39	0.82
II 6 教科書・授業レジュメプリントや参考文献が効果的だった	3,006	4.17	0.91
II 7 板書のしかたが適切だった	2,385	3.76	1.05
II 8 映像視覚教材(パワーポイント、ビデオなど)の使用が効果的だった	2,282	4.21	0.93
II 9 教員は授業の準備を周到に行っていた	2,957	4.39	0.79
III この授業から得るものができたもの			
III 1 自分にとって新しい考え方・発想	3,032	4.08	0.91
III 2 授業で扱った分野に関する基本的な専門知識	3,031	4.05	0.88
III 3 自分で調べ、考える姿勢	3,032	3.59	1.01
III 4 授業で扱った内容が持つ、現代に通じる普遍的な意味	3,029	3.95	0.92
IV 総合的にみて、この授業は…			
IV 1 わかりやすい授業だった	3,032	4.19	0.97
IV 2 授業全体の目標が明確だった	3,032	4.16	0.95
IV 3 学問的興味をかきたてられた	3,031	3.90	1.05
IV 4 この授業を受けて満足した	3,031	4.09	1.00

注 1) 回答者数は延べ人数(II 7, II 8 では「該当しない」と回答したものは除いている)

注 2) 平均値は、各選択肢の評価点を使用して算出

(5:大いにそう思う、4:そう思う、3:どちらともいえない、2:あまりそう思わない、1:そう思わない)

6-3 「グループ集計」科目一覧

表 1 5 経済学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	経済数学入門	前期
2	経済数学入門	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	統計学1	前期
2	統計学1	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	情報処理入門	前期
2	情報処理入門	前期
3	情報処理入門	前期
4	情報処理入門	前期
5	情報処理入門	前期
6	情報処理入門	前期
7	情報処理入門	前期
8	情報処理入門	前期
9	情報処理入門	前期
10	情報処理入門	前期
11	情報処理入門	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	経済情報処理A	前期
2	経済情報処理A	前期
3	経済情報処理C	前期
4	政策情報処理A	前期
5	財務情報処理A	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	前期
2	基礎ゼミナール1	前期
3	基礎ゼミナール1	前期
4	基礎ゼミナール1	前期
5	基礎ゼミナール1	前期
6	基礎ゼミナール1	前期
7	基礎ゼミナール1	前期
8	基礎ゼミナール1	前期
9	基礎ゼミナール1	前期
10	基礎ゼミナール1	前期
11	基礎ゼミナール1	前期
12	基礎ゼミナール1	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	前期
2	基礎ゼミナール1	前期
3	基礎ゼミナール1	前期
4	基礎ゼミナール1	前期
5	基礎ゼミナール1	前期
6	基礎ゼミナール1	前期
7	基礎ゼミナール1	前期
8	基礎ゼミナール1	前期
9	基礎ゼミナール1	前期
10	基礎ゼミナール1	前期
11	基礎ゼミナール1	前期
12	基礎ゼミナール1	前期
13	基礎ゼミナール1	前期
14	基礎ゼミナール1	前期
15	基礎ゼミナール1	前期
16	基礎ゼミナール1	前期

グループ7

No.	科目名	学期
1	基礎ゼミナール1	前期
2	基礎ゼミナール1	前期
3	基礎ゼミナール1	前期
4	基礎ゼミナール1	前期

グループ8

No.	科目名	学期
1	経済学	後期
2	経済学	後期
3	経済学	後期
4	経済学	後期
5	経済学	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	簿記	後期
2	簿記	後期
3	簿記	後期
4	簿記	後期
5	簿記	後期
6	簿記	後期
7	簿記	後期
8	簿記	後期
9	簿記	後期
10	簿記	後期

表 1 6 経営学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	リーダーシップ入門(BL0)	前期
2	リーダーシップ入門(BL0)	前期
3	リーダーシップ入門(BL0)	前期
4	リーダーシップ入門(BL0)	前期
5	リーダーシップ入門(BL0)	前期
6	リーダーシップ入門(BL0)	前期
7	リーダーシップ入門(BL0)	前期
8	リーダーシップ入門(BL0)	前期
9	リーダーシップ入門(BL0)	前期
10	リーダーシップ入門(BL0)	前期
11	リーダーシップ入門(BL0)	前期
12	リーダーシップ入門(BL0)	前期
13	リーダーシップ入門(BL0)	前期
14	リーダーシップ入門(BL0)	前期
15	リーダーシップ入門(BL0)	前期
16	リーダーシップ入門(BL0)	前期
17	リーダーシップ入門(BL0)	前期
18	リーダーシップ入門(BL0)	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	BL1	後期
2	BL1	後期
3	BL1	後期
4	BL1	後期
5	BL1	後期
6	BL1	後期
7	BL1	後期
8	BL1	後期
9	BL1	後期
10	BL1	後期
11	BL1	後期
12	BL1	後期

グループ2

No.	科目名	学期
1	BL2	前期
2	BL2	前期
3	BL2	前期
4	BL2	前期
5	BL2	前期
6	BL2	前期
7	BL2	前期
8	BL2	前期
9	BL2	前期
10	BL2	前期

表 17 コミュニティ福祉学部

グループ1

No.	科目名	学期
1	社会学1	前期

グループ2

No.	科目名	学期
1	老年学	前期
2	家族社会学	前期
3	ウエルネス福祉論	前期
4	社会福祉発達史1	前期
5	キリスト教人間学	前期
6	情報処理3	前期
7	障害学入門	前期
8	社会保障論1	前期
9	キリスト教思想1	前期
10	宗教心理学1	前期
11	芸術的人間学	前期
12	グリーンスタディ	前期
13	死生学	前期
14	公衆衛生学	前期

グループ3

No.	科目名	学期
1	地域福祉論	前期
2	介護概論	前期
3	精神保健福祉援助技術各論1	前期
4	家族臨床心理学	前期
5	医学概論	前期
6	福祉マネジメント特論2	前期
7	福祉環境論	前期
8	福祉工学	前期
9	コミュニティ臨床心理特論3	前期
10	精神保健学1	前期
11	精神保健福祉論1	前期
12	児童福祉論	前期
13	ソーシャルワーク論	前期
14	福祉カウンセリング入門	前期
15	権利擁護と成年後見制度	前期
16	ケアマネジメント論	前期

グループ4

No.	科目名	学期
1	医療と福祉特論1	前期
2	家族政策	前期
3	地球コミュニティ論	前期
4	国際経済論	前期
5	地方財政論	前期
6	ライフサイクルの心理学	前期
7	コミュニティ人間形成論	前期
8	世界と宗教	前期
9	エスニシティ論	前期
10	質的リサーチ	前期
11	コミュニティとカウンセリング	前期
12	政策過程論	前期
13	公共哲学	前期
14	住宅政策	前期
15	教育政策	前期
16	自治体政策計画論	前期
17	災害心理学	前期

グループ5

No.	科目名	学期
1	福祉とレクリエーション	前期
2	小児保健・精神保健	前期
3	レクリエーション援助演習	前期
4	メンタルマネジメント	前期
5	スポーツビジネス論	前期
6	バイオメカニクス	前期

グループ6

No.	科目名	学期
1	法学2	後期
2	心理学2	後期
3	社会教育施設論2	後期
4	社会教育計画2	後期

グループ7

No.	科目名	学期
1	情報処理2	後期
2	宗教人間学	後期
3	社会調査法	後期
4	人権論	後期
5	生涯スポーツ論	後期
6	キリスト教社会福祉	後期
7	臨床社会学	後期
8	宗教心理学2	後期
9	福祉人間学	後期
10	グループダイナミクス	後期
11	リスクマネジメント論	後期

グループ8

No.	科目名	学期
1	高齢者福祉実践論	後期
2	グループワーク	後期
3	公的扶助論	後期
4	社会福祉法制	後期
5	社会福祉施設経営論	後期
6	福祉マネジメント特論3	後期
7	リハビリテーション心理学	後期
8	女性福祉論	後期
9	リハビリテーション論	後期
10	精神保健学2	後期
11	精神科リハビリテーション学1	後期
12	精神保健福祉論2	後期
13	発達障害論	後期
14	障害者福祉論	後期
15	障害幼児ソーシャルワーク論	後期

グループ9

No.	科目名	学期
1	政策学の基礎知識	後期
2	政策科学	後期
3	平和学	後期
4	余暇生活論	後期
5	比較文化心理学	後期
6	NPO論	後期
7	データ分析法	後期
8	コミュニティ政策特論	後期

グループ10

No.	科目名	学期
1	障害者スポーツ論	後期
2	運動処方・療法	後期
3	スポーツ科学総論	後期
4	アダプテッドスポーツ論	後期
5	コンディショニング論	後期
6	コミュニティスポーツ論	後期
7	ウエルネス文化特論	後期
8	スポーツマネジメント論	後期

大学教育開発・支援センター 教学 IR 部会 (2013 年 9 月現在)

部会長	原 田	久	(法学部、副総長)
	堀	耕 治	(現代心理学部長)
	松 本	康	(教務部長、社会学部)
	山 口	和 範	(経営学部)
	石 田	和 彦	(総長室教学改革課)
	林	英 明	(全学共通カリキュラム事務室)

事務局

	今 田	晶 子	(大学教育開発・支援センター)
	佐 藤	百 恵	(大学教育開発・支援センター)
	上 原	裕 輔	(大学教育開発・支援センター)

2012 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

委員長	東 條	吉 純	(教務部副部長、法学部)
事務局	今 田	晶 子	(大学教育開発・支援センター)
	伊 藤	直 子	(大学教育開発・支援センター) 2012 年 5 月まで
	佐 藤	百 恵	(大学教育開発・支援センター) 2012 年 6 月から
	上 原	裕 輔	(大学教育開発・支援センター)
	間 中	賢 治	(教務事務センター)
	椿	ま り	(新座キャンパス事務部教務課)

2012 年度「学生による授業評価アンケート」報告書

2013 年 9 月発行

編集 立教大学 2012 年度「学生による授業評価アンケート」実施委員会

発行 立教大学 大学教育開発・支援センター

〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1

TEL 03-3985-4624 FAX 03-3985-4615

<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/CDSHE/>

e-mail cdshe@grp.rikkyo.ne.jp

